

公立大学法人 滋賀県立大学

スチューデントファーム

「近江楽座」

まち・むら・くらしふれあい工舎

2016 年度 活動報告書

近江楽座＝学生らしさを活かして地域に学び、育ち、貢献できる場 をめざしています

はじめに

学生たちが気づく地域活動の公益性

学生たちは、自分の関心ごとや、勉強、サークル活動、アルバイトなど目の前の日々の暮らしで手一杯の日常を送っている。彼らが地域社会で起きていることに当事者意識を持ち、かつその現場に参加しようという気持ちになることは簡単なことではない。毎年新しい学生たちが近江楽座の門を叩いてくる。大学で学んでいる自分の研究領域や、関心ごとから地域と接点を持ち、共感できる仲間や参加者が集まり始める。そこで多様な視点で地域課題への理解を深め、共に活動する機会を通して公益性の視点が芽生えてくる。

地域活動の本質は地域が抱える様々な問題解決のために尽力することや、有形無形の資源の発掘、情報発信、産業発展、伝統の継承、プライドづくりなど社会的な面で尽力することにある。志を共有している個人が、集まって組織になることでそこには継続の力が生まれてくる。そして担い手の個性や能力によって公益力のある活動となって行く。しかし、そのような人材や組織を短い時間で育むことはできない。

そこで考えてみよう。大学という公共資源は、意外と社会的信用力は大きい。

様々な学部、広範な教育研究領域において専門的な知見を持つ人材が多い。歴史文化に造詣が深い者、建築、まちづくりを専門とする者、問題発見調査能力がある者、デザインができる者など、それら個性や能力を総動員できる可能性を持っている。講演、講義、執筆など研究発表を通して社会的な情報発信力、広報宣伝効果もある。これまで、地域と大学の関係は、敷居が高く日常的な関係は薄かった。大学教員は、分野にもよるが、必ずしも現場経験が豊富でなく、机上の理論優先のアカデミックな対応しか行ってこなかった。しかし、大学で学ぶ学生たちには、自分たちの能力の成長度合いを試す機会と場所が必要だ。本学で

は、授業や課題で学外に出て地域との接点をはかる取り組みやフィールドワークを大学創立以来続けてきた。地域は、先人たちの手による営み、風景、自然を大切に暮らしにとどめおいている。その中で得やすい対話を通じて、多くの指摘から問題意識を醸成させる教育を行なっている。その経験が知らず知らずのうちに地域へのハードルを低くしている。成長途上の自分たちでもこんなことができるのではないか、地域のためだけでなく自分のためだ、という気づきを得られる自主的な自立した活動の場が近江楽座なのだ。

学生たちの地域への気づきには、まだ頼りないボランティア精神のような正義感がモチベーションになっている。そこには地域への公益性の意識が潜んでいる。近所どうしのつながりに割り込んで行くような力ずくの活動ではない。明確なメッセージを発信できるようになることで、活動が理解され、プライドが芽生え、しっかりとした組織になって活動の質、意義を高めることができるだろう。後輩たちはその組織からも学び、当事者となって活動を継承している。学生たちの地域活動が日常になりつつある。

平成 30 年 2 月
近江楽座専門委員会委員長
印南比呂志
(人間文化学部 生活デザイン学科)

目次

はじめに	1
1 近江楽座について	5
1-1 近江楽座とは	6
1-2 プロジェクト区分	7
1-3 プロジェクトの採択について	8
2 各プロジェクトからの活動報告	11
2-1 活動実績報告	12
2-2 『らくざしんぶん』	56
3 共通プログラムの報告	63
3-1 活動の安全確保のためのスキルアップ講座	64
3-2 中間報告会「伝えよう！活動のあしあと展」	66
3-3 活動報告会 まちづくり famer's fest - まちをたがやす人たちの感謝祭 -	70
4 学生有志活動	75
4-1 近江楽座 合同説明会「楽座市」	76
4-2 オープンキャンパス	78
4-3 ぞろぞろ会	79
4-4 B プロジェクト「県営開出今団地コミュニティ再生プロジェクト」	80
5 他大学等との交流	81
5-1 法政大学との交流	82
5-2 全国公立大学学生大会 LINK topos	83
6 情報発信	85
6-1 ホームページ、プロジェクトレポート、リーフレット	86
7 付録	87
7-1 プログラム推進メンバー	88
7-2 メディア掲載一覧	89

1 近江楽座について

1-1 近江楽座とは

滋賀県立大学の“スチューデントファーム「近江楽座」-まち・むら・くらしふれあい工舎-”は、地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する。」を目的とする学生主体のプロジェクトを募集、選定し、全学的に支援する教育プログラムです。

平成16年度に文部科学省「現代的教育ニーズ取組み支援プログラム(現代GP)」に採択され、平成18年度までの3年間の活動実績が大学発地域貢献の先進的な取組みとして学内外で高く評価されました。そして、翌平成19年度からは大学独自の予算を用いてプログラムを継続し、平成28年度までの13年間で延べ289のプロジェクトが地域と連携した活動を展開しています。

教育効果を高め、大学と地域の連携を深めるための3つの目標

- 地域の課題に大学・学生が取り組み、地域の活性化に向けて共に活動する。
- 学生が地域の方々と一緒に活動することにより、学内だけでは学べないことを体験する。
- 大学と地域が共同して、よりよい地域づくり・人づくりにつながるしくみをつくる。

3つのサポートシステム

近江楽座専門委員会・学生委員会・近江楽座事務局(地域共生センター)の連携の下、3つのサポートシステムにより、全学的に活動を推進しています。

活動助成システム

“スチューデントファーム「近江楽座」”として選定されたプロジェクトの事業計画に基づき、活動に必要な事業費を審査し、助成します。

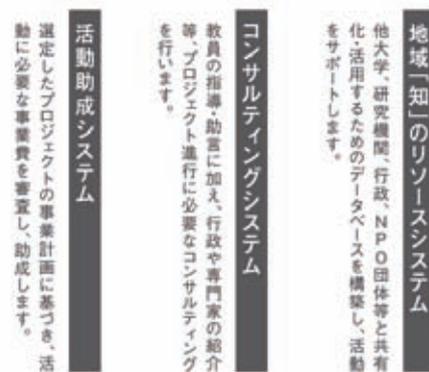
コンサルティングシステム

教員の指導・助言に加え、行政や専門家の紹介など、学生がプロジェクトを進めていくために必要なコンサルティングを行います。

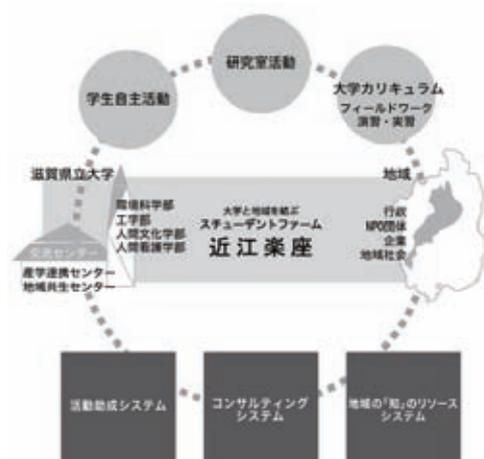
地域「知」のリソースシステム

大学と地域連携に係わる情報を他大学、研究機関、行政、NPO団体などと共有化・活用するためのデータベースを構築し、活動をサポートします。

<3つのサポートシステム>



<サポートシステム概念図>



1-2 プロジェクト区分

平成 19 年度より、「地域活性化への貢献」をテーマに学生主体の地域活動を行う「A プロジェクト」に加え、新たに、自治体や企業等から提示された課題について、学生主体のプロジェクトチームを結成し活動する「B プロジェクト」がスタートしました。

| A プロジェクト

「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動を募集します。

昨年度までの継続活動を対象とした①「継続プロジェクト」、新規活動を対象とした②「新規プロジェクト」、さらに平成 23 年度から新たに③「S プロジェクト」として、これまでの実績をもとにステップアップを目指すプロジェクトで活動資金の助成を必要としないプロジェクト、の 3 つの区分で募集し、支援するプロジェクトを選定しています。

| B プロジェクト

自治体や企業、団体等から依頼のあった課題について、「近江楽座」として取り組むテーマを設定し、学生主体のプロジェクトを募集します。学生チームにはテーマに対する企画提案を求め、採択されたチームは、指導教員と地域共生センターがフォローし、依頼先と共同で取り組みます。

A プロジェクト

「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動プロジェクト。

継続プロジェクト

S プロジェクト（平成 23 年度より開始）
活動資金の助成を必要とせず、これまでの実績をもとにステップアップを目指す取組み

新規プロジェクト

B プロジェクト

学生主体のチームが自治体や企業等から提示された課題に、プロポーザル方式で企画提案を行い、選定されたチームと依頼先とが共同で取り組むプロジェクト（平成 19 年度より開始）

1-3 プロジェクトの採択について

｜ プロジェクト募集期間

A プロジェクト
日 時：2016年4月11日(月)～5月9日(月)

｜ 募集説明会

A プロジェクト
日 時：2016年4月11日(月)12:30-13:00
場 所：滋賀県立大学講義棟 A4-107

｜ 応募件数

A プロジェクト 28 チーム
うち継続プロジェクト21件
(S プロジェクト1件含む)

｜ プロジェクト審査

A プロジェクト「公開プレゼンテーション・審査会」
日 時：2016年5月21日(土)9:00-16:00
場 所：中講義室 A7-101
内 容：プレゼンテーション(プレゼンテーションシートによるプロジェクト説明)および質疑応答、審査(非公開)

選定委員(順不同 敬称略)：

- 滋賀県立大学 副理事長 堺井 拓
- 滋賀県立大学環境科学部 教授 浦部美佐子
- 滋賀県立大学国際化推進室 主査 岩間 希
- 編集工房(有)北風写真館 井上 一
- たかしま市民協働交流センター事務局長 坂下靖子

｜ 採択および採択通知

A プロジェクト
日 時：2016年5月26日(木)
通知方法：近江楽座ホームページおよび学生ホール掲示板にて通知

｜ 採択件数

A プロジェクト 23 チーム
うち継続プロジェクト21件
(S プロジェクト1件含む)

｜ 活動説明会

A プロジェクト
日時：2016年6月1日(水)12:20-13:00
場所：講義室 A4-107
内容：採択プロジェクト代表者に対する事業計画、会計処理等の進め方に関する説明会



活動説明会の様子

<公開プレゼンテーションの様子>



事前に審査員の先生方にそれぞれの応募チームの事業計画書と予算計画書に目を通してもらい、公開プレゼンにて各チームの発表・質疑応答をふまえて、採点・審査を行いました。

チームはプレゼンシートを用い、プロジェクトの目的・意義や活動内容について4分間の発表を行いました。プレゼンテーション後は、3分間の質疑応答があり、審査員の先生方からプロジェクト内容に対してのすどい質問がなげかけられました。



2 各プロジェクトからの活動報告

2-1 活動実績報告

01	とよさと快蔵プロジェクト	12
02	あかりんちゅ	14
03	政所茶レン茶 [®]	16
04	地域博物館プロジェクト	18
05	BAMBOO HOUSE PROJECT	20
06	座・沖島	22
07	人と環境を救う雨水タンク	24
08	信・楽・人-shigaraki field gallery project-	26
09	障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト	28
10	未来看護塾	30
11	とよさらだプロジェクト	32
12	八坂町プロジェクト	34
13	たのうらまちづくりプロジェクト	36
14	内湖の再生と地域の水辺コーディネート	38
15	かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-	40
16	Taga-Town-Project	42
17	たけとも一竹の会所・友の会	44
18	おとくらプロジェクト	46
19	木興プロジェクト	48
20	フラワーエネルギー「なの・わり」	50
21	男鬼楽座	52
22	タクロバン復興支援プロジェクト	54

次ページ以降のチームデータについて補足説明

※近江楽座活動年度について

H : 不参加

H : 参加
を示しています

※メンバー数は、活動に関わった学生の総数です。

01 とよさと快蔵プロジェクト



空き古民家の活用でまちづくり

使われなくなった民家や蔵が点在する豊郷町で、空き家をまちの資産として活用し、地域を盛り上げる活動を行っています。地域のイベントへの参加やイベント企画、蔵を改修したBAR運営なども行い、まちを盛り上げる人たちをサポートしています。

TEAM DATA

チーム名：とよさと快蔵プロジェクト

代表者：馬場孝朗（環境科学部）

メンバー数：46名

指導教員：迫田正美（環境科学部）

活動場所：犬上郡豊郷町、学内

関係団体：NPO法人とよさとまちづくり委員会

近江楽座活動年度：H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26 H27

PROJECT

実施事業

- (1) ゲストハウス改修
★見出し写真：夏合宿（09/25）

- (2) 八町地蔵盆



八町地蔵盆（8/20）

- (3) タルタルーガビアガーデン

- (4) とよさとハロウィン 2016

- (5) 湖風夏祭

- (6) カロム大会

- (7) コスモスフェスタ



コスモスフェスタ（10/16）

- (8) ミツマルシェ

- (9) 定例会

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

昨年から引き続き行われてきたゲストハウスの改修が今年度の一大事業である。家具や内装ごとに班分けを行い、その班が作業でも指揮をとるような形で夏季に合宿を行った。この方法は成功といえ、2週間の合宿で改修の大部分を終えることができた。しかし長引く作業にモチベーションが下がってこない。モチベーションが下がることで作業への参加人数が減り、また作業が長引くという悪循環に陥ってしまった。第一に工程表などを用いた計画的な作業、また作業がうまく進まない時のフォローをすることが必要であると感じた。

自分たちが企画するイベントを増やすことができなかったが、旧豊郷小学校で行われた音楽会や新たに町のお祭りに参画することができた。イベントに参加することは、普段関わりを持つことが少ない町の方と話す機会にもなる。実際に話を聞いてみると意外と多くの方が私たちの活動のことを知っていてくださり、自分たちの活動がまちの方々に支えられていることが実感できる。これからも積極的にイベントに参加し、豊郷を盛り上げる一役を担っていきたい。

今年は、毎週土曜日の通常営業に加えて、湖風祭や、ハロウィンや七曲リフェスタなどの地域のイベントに、出張タルタルとしてたくさん出店できたことが成果であった。いろいろなイベントに出店することで、タルタルーガの知名度も上昇し、イベントで知り合ったお客さんが店に足を運んでくださった。今後の課題としては、そういったお客さんとの縁を大事にしつつ、メニューの改良、備品整理、店の掃除を徹底するなど、より満足してもらうことが必要であると感じる。今年で10周年を迎え、お客さんに日ごろの感謝を伝えられるようなイベントが計画できたら、と考える。

活動を通して学んだこと (抜粋)

古民家の改修をするだけでなく、カラム大会など様々な地域のイベントに参加することで、多くの方々と関わることができ、豊郷町についても良く知ることができた。地域の方々との交流をもっと深めるために、来年度もぜひ参加したいです。

内田夢 (生活デザイン学科 1 回生)

プロジェクトの存在を知ったのは入学式の日に勧誘のパンフレットをもらったときに、単に改修、左官という言葉への興味本位から参加を決めた。しかし、活動を通して豊郷という地域とのつながり、豊郷への愛を大切にしているプロジェクトだということが実感できた。

宮本弥一 (環境建築デザイン学科 1 回生)

今年から参加し、何も分からない状態の私に、先輩方はとても親切にアドバイスをしてくださった。まちの方々と関わったこと、古民家の改修をしたこと、お祭りなどのイベントに参加したこと、どれも新鮮で印象に残る体験だった。新たに先輩や後輩と知り合えたことで普段の大学生生活もより楽しくなった。

鎌塚芳彦 (環境建築デザイン学科 2 回生)

夏に行われた合宿は多いときで 25 人ほどの参加があり、前年度に続き多くの参加があった。特に今年度は一回生や生活デザイン学科の参加が目立ち、フレッシュな 1 年になった。イベントにも積極的に参加し、タルタルーガも数多く出張出店したため、いろんな人が関わることができ、忙しくも楽しい 1 年であった。

堤愛里加 (環境建築デザイン学科 3 回生)

地域からのコメント (抜粋)

NPO 法人とよさとまちづくり委員会 副代表 岡村博之さん

とよさと快蔵プロジェクトのメンバーのみなさん、その支えになっていただいている滋賀県立大学には感謝しています。みなさんの活動は、地元に住む人に感動を与え、周辺の人に豊郷の魅力を作り喜びを発信していただいております。活動がマンネリになることなく、いつも新しい発想や行動に我々自身が力を頂いております。今年はみなさんの今までの活動が実り、豊郷町と住民の中でもグループが立ち上がり、大きく動いていくようになります。凄いことです！これもみなさんの先輩から、この豊郷町に来てコツコツと積み上げてこられた結果です。

NPO 法人とよさとまちづくり委員会 副代表 前田広幸さん

今年のメンバーはイベントにも積極的に参加し、準備から撤収まで責任をもってやってくれました。改修についても合宿を組んだり、土日作業して、よくやってくれました。豊郷のシェアハウスに住むメンバーが中心となり、先輩後輩がまとまっていたと思います。一番助かったのは、私たちまちづくり委員会と定期的に会合を開き進めてくれたことです。新年度より民泊事業が本格的に始まります。同じ活動拠点をもつとよさらだとも連携して、豊郷町を盛り上げてください。

指導教員より

環境科学部 迫田正美

昨年度から足掛け 2 年をかけて改修を進めてきたゲストハウスも最終段階に入った。

地域でのイベント活動などへの参加の幅も広がり、ますます活動の幅を広げていってくれることを期待している。

今後は地域創生事業などにも関連しながら地域の活性化に寄与するプログラムを踏まえた改修作業となるものと思われるので、まちづくり委員会の方々との連携を深めるとともに、行政の方々と十分に意見交換しながら活動を展開してくれることを期待する。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



ビアガーデン チラシ



ミツマルシェ チラシ

<その他成果物>

ミツマルシェポスター

カイソウノススメ



エコでスローな夜を

お寺などからいただいた使用済みの廃棄残蠟を再利用してリサイクルキャンドルを作り、キャンドルナイト、キャンドル作り教室、キャンドル販売などを行っています。自分たちで運営資金をまかない、独自予算で活動している唯一のSプロジェクトです。

TEAM DATA

チーム名：あかりんちゅ
 代表者：中根彩矢香（環境科学部）
 メンバー数：18名
 指導教員：平山奈央子（環境科学部）
 活動場所：学内、彦根市、滋賀県、県外
 関係団体：ひこねキャンドルナイト実行委員会
 近江楽座活動年度：H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26 H27

PROJECT

実施事業

- (1) 湖風祭
- (2) 熊本地震チャリティ活動
★見出し写真：熊本地震追悼キャンドルナイト (08/18)
- (3) ティーライトキャンドルの製造委託
- (4) 商品キャンドル作成と和ろうそくの活用



商品キャンドル製作 (06/11)

- (5) チャッカポン作成
- (6) ひょうたんキャンドルホルダー作成
- (7) カラオケスタジオ PAL キャンドルナイト
- (8) 沖島キャンドル作り教室
- (9) 豊郷地蔵盆キャンドルナイト
- (10) 大洞子ども会キャンドル作り教室
- (11) ミツマルシェ
- (12) OKB キャンドルナイト
- (13) Harmony キャンドル作り教室
- (14) びわ湖灯り絵巻 彦根灯花会
ひこねキャンドルナイト

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年の活動の軸は、熊本地震のチャリティー活動と他団体とのコラボレーション企画である。これらの活動を自主企画あるいは合同企画として発案・実施し、おおむね理想通りに達成することができた。また、その他の活動についても充実した内容となった。

熊本地震のチャリティー活動では、キャンドルの売り上げ金額の一部を寄付し、また、販売スペースやキャンドルナイトの際に募金箱を設置することで、広く寄付を募ることができた。湖風夏祭での開催となったため多くの方にこのチャリティー活動を知っていただけた。一方、キャンドルナイトの規模があまり大きくはできなかったこと、キャンドルナイトの意図が十分に来場者には伝わらなかったことは反省すべき点である。湖風祭実行委員会との連携をさらに図っていくことで、こうした点は改善できたのではないかと考える。今後も、チャリティー活動や追悼キャンドルナイトなどを実施し、今までは別の形での地域支援を行いたいと考えている。

他団体のコラボ企画では、近江楽座の各プロジェクトを中心に多くの団体とコラボレーションをすることができた。しかし、ひょうたんキャンドルホルダーなどの商品化、販促活動等の具体的な方法までは十分に進めることができなかったため、来年度の課題としたい。また来年度は学外団体とも積極的にコラボしていきたい。

その他の活動についても、各種のイベント依頼や残蠟回収などは例年に比べて充実していたように感じるが、一方でイベントの依頼等が一時期に集中してしまい、十分な運営ができない時があった。活動に参加するメンバーが偏っており、メンバー内でイベントの経験や活動目的・意志などに差が生じているのではないかと考えられる。今一度、あかりんちゅとは何か、メンバー内で確認していく必要があると再認識した。

活動を通して学んだこと (抜粋)

活動では子どもたちと接することが多く、キャンドル作り教室ではどんな年齢であっても、分かりやすく安全に作れるように指導するように心がけています。私は教職課程を履修していて、将来は教員を目指しているため、この経験は将来絶対に役に立つものだと思います。

小寺真央 (地域文化学科1回生)

岐阜で行った大垣共立銀行でのOKBストリートのキャンドルナイトは、毎年、依頼がある。雨天のため、屋内開催となり、予定していたキャンドルの配置を早急に変えなければならなかった。屋外でキャンドルナイトをするときは、もしもの時に備え万全の態勢でイベント場所に向かうことが大切だ。

山本幹子 (地域文化学科1回生)

現在はドイツに留学中ですが、あかりんちゅの一員として出来ることはしていきたいと考え、積極的に活動に参加しています。イベントには参加できなくても、運営準備の手伝いなどをすることはできます。たとえ直接参加できなくても、メンバーの一員として出来る限り協力していくことの大切さを学びました。

浅田真以 (国際コミュニケーション学科2回生)

地域からのコメント (抜粋)

ひこねキャンドルナイト実行委員会 会長 中村明夫さん

平成29年3月より、彦根市で国宝彦根城築城410年祭が行われますが、10年前に400年祭が実施されました。そのイベントの1つとして、彦根で初めてのキャンドルナイトが彦根観光協会が中心になって実施されました。翌年から、有志が集まりキャンドルナイト実行委員会が出来ました。その当初より、あかりんちゅさんとの繋がりが始まりました。当初は、いちスタッフとしての参加でしたが、年々、実力を発揮され、また、毎年新入生が入るので、その新鮮な意見にどんどん頼っていく事になり、最近では、全体のグランドデザインまでお願いする事になり、大変頼りになる重要なメンバーです。

指導教員より (抜粋)

環境科学部 平山奈央子

今年度は依頼によるイベント開催が多かった。活動の継続性が徐々に実を結び、地域や企業から理解を得ていることがうかがえる。新たにコラボレーションしたあるいは依頼を受けたきっかけとしては、前年度の活動報告会やホームページ等ということで、あかりんちゅの活動に共感し、関心を持っていただいた団体とつながりができたことは今後の活動にとっても有意義なことと考えられる。また、年度当初の活動計画は前年度の課題を鑑みて立てられ、おおよそそれらを達成できている。これは、あかりんちゅのメンバーの他、依頼をしてくださった組織、残骸をわけていただいた方々、コラボレーションした団体の協力があつてなし得たことだと考える。次年度以降、あかりんちゅとして自主事業やコラボレーション事業、依頼事業のウエイトと実施時期について考え、無理なく、しかし時には挑戦的に活動を発展させることを期待する。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



ひょうたんキャンドルホルダー



熊本地震チャリティ活動

<その他成果物>

アロマキャンドル

03 政所茶レン茶[®]ー



学生たちによるお茶づくり

滋賀県東近江市政所町にて、お茶づくりを通して地域活性化にチャレンジしています。本学の授業「地域再生システム(特)論」をきっかけに結成されました。お茶づくり、集落向け情報誌の発行、地域イベントの開催の3本を軸に活動しています。

TEAM DATA	
チーム名:	政所茶レン茶 [®] ー
代表者:	岡崎梓織(人間文化学部)
メンバー数:	11名
指導教員:	上田洋平(地域共生センター)
活動場所:	東近江市政所町
関係団体:	東近江市役所
近江楽座活動年度:	H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26 H27

PROJECT 実施事業

(1) お茶づくり



摘んだ茶葉を茶工場へ運搬 (05/22)

★見出し写真: 茶摘み終了後 (05/22)

- (2) イベント企画
- (3) 地域内のイベントへの参加
- (4) 地域外のイベントへの参加
- (5) 湖風祭での茶葉利用
- (6) アイデアコンテストへの応募
- (7) あかりんちゅとのコラボ商品開発
- (8) 聞き取り調査
- (9) もちもち交流会

1年の活動まとめ・考察(成果と課題)(抜粋)

今年度は、今までと比べてより多くの人・団体との繋がりを得られた年であった。地域団体をはじめ、同じように茶産地とかかわる同世代の学生たちと交わり、地域との関わり方や事業の意義を話し合い、メンバーの多くが良い刺激を受けることができた。

一方、例年のように、一回生に「自分と地域との関わりが薄い」という不安感を抱かせる結果になってしまった。また同じ不安を抱く地域の方々もおられることを常に忘れず、地域の方々とより密にコミュニケーションをとる方法を考えていくべきである。

今年度から、政所茶レン茶[®]ーと、その創設メンバー・OBらで構成される「茶縁の会」とが別のプロジェクトとして事業を進めていくことになり、茶縁の会、政所茶レン茶[®]ー共、新しい事業の展開の仕方を考えながら、なおかつ今までの一年間の事業を引き継いでいくという、新しい歩みの年となった。

その中で、学生メンバーの数に対し、所有する農園の範囲が広すぎるという課題とぶつかった。農作業が円滑に進まないという問題が慢性化し、農作業をこなすのに精一杯になってしまい、自分たちがしたいと思っている企画に打ち込めず、拠点などの利用から離れてしまった。この問題は茶縁の会と話し合っ、今後、解決していくことになった。自分たちの限界と向き合い、自分たちの負担が少しでも減った中で、新たな企画や奥永源寺地域と新たな向き合い方をしていく余裕が生まれていくきっかけになるのであれば、プラスになる動きとして捉えるべきであろうと考えている。

奥永源寺で取り組む事業は、このまま横這い、よもや下降ではいけない。向上心のある学生が集まった中で、個人の中で抱く考えを形にし、実現可能な事業を実現可能なペースでこつこつと作り上げていく事が必要であると感じている。今後、さらに地域に寄り添った活動を考案していきたい。

活動を通して学んだこと (抜粋)

「お茶を栽培して収穫する」、貴重な体験が出来るという魅力を感じ、入部を決めました。入部してみると得られた経験は期待以上のものでした。活動の中では組織、また個人としても多くの課題が見つかり、課題に対処する事が貴重な体験でした。お茶の木と共に自分自身も成長出来た1年間であったと思います。

長谷川瑞紀 (機械システム工学科1回生)

自分が大学に入りお茶の栽培や販売に関わるとは思っていなかったため、貴重で素敵な時間を過ごすことができとても楽しかったです。また、イベントの際にはお客様がお茶を買ってくださったり暖かいご声援をいただき、やりがいや「政所茶」を中心としたつながり、ご縁を感じることができました。

和田夏実 (地域文化化学科2回生)

活動はお茶づくりのみに留まらず、出来た製品を自分達で出店販売したり地域の人との交流を行っていく機会が多々ありました。商品となるお茶を作ること、商売を行うことの難しさを実感しました。また学生だけでなく地域の人々と上手に関わっていくためにどうすべきか、考える機会も得られました。

堀口実紀 (環境生態学1回生)

地域からのコメント (抜粋)

木地師・地域イベント主催 北野清治さん

今年も色々永源寺のイベントに参加してもらって嬉しいです。やっぱり若い子がいると、パツと会場も明るくなるしね。ブース出してくれてるだけで、お客さんが見て立ち止まってくれるし、それで茶レン茶”ーさんの子達も奥永源寺のことよう知ってくれはるんで助かります。毎年こうやってイベントやって、永源寺のみならず一緒に手伝って食べてコミュニケーションして、そうやってまず参加するのが大事なのでね、来年からもまたよろしくお願ひします。奥永源寺もまだまだたくさん面白い人いはるんで、どんどん協力してってください。

指導教員より

地域共生センター 上田洋平

「創成期」の終わり

代表者で数えると3代、年数にして丸4年、ここまでが「創成期」ということになるか。ロジスティック(成長)曲線に喩えると、草創期から急成長を経て、この1年は安定平衡に向けた曲がり角の時期だったのではないか。失敗するとクラッシュする。冷や冷やする場面もあったが、無事曲がり切ったのではないかと思う。これから第4世紀が始まる。前3代は「カリスマ」とは言わないまでも、それぞれにキャラクターの濃い代表(いずれも「muse(女神)」であった)が、よく言えばリーダーシップ、言い換えると「いろいろ一手に背負い込んで」進んできた面がある。しかし来る第4世代の様子を観察していると、新入生も含めたメンバーの合議と役割分担がうまく機能し、チームワークが実現している。卒業生・先輩社会人による姉妹(事実上完全に「姉」)団体である「政所茶縁の会」による支援に感謝し、背中を見ながら、シナジーを生み出して欲しいと思う。期待している。

DELIVERABLE 成果物/制作物



政所の紹介文 (留学生に配布)



新茶パッケージ

<その他成果物>

活動紹介資料 (宇治茶まちづくりカレット)

番茶パッケージ

04 地域博物館プロジェクト



文化財を救え！我ら学生学芸員！

民具や古文書、お祭りなど、地域には多くの文化財があります。“地域文化財”や地域の歴史・文化などを住民の方々とともに調べ、活用し“地域博物館”をつくりあげていくことで、地域の魅力を再発見することをお手伝いします。

TEAM DATA

チーム名：スチューデント・キュレーターズ

代表者：渡邊文乃（人間文化学部）

メンバー数：11名

指導教員：市川秀之、東幸代、武田俊輔（人間文化学部）

活動場所：学内、高島市、守山市、米原市、彦根市、近江八幡市

関係団体：白谷荘歴史民俗博物館

近江楽座活動年度：(H16)(H17)(H18)(H19)(H20)(H21)(H22)(H23)(H24)(H25)(H26)(H27)

PROJECT

実施事業

(1) 白谷荘歴史民俗博物館調査事業



白谷荘歴史民俗博物館調査 (03/05)

(2) 奥伊吹調査事業



奥伊吹調査 (09/18)

(3) 博物館夏祭り出展

★見出し写真：博物館夏祭 (07/18)

(4) 民俗映像資料上映会

(5) 湖風祭出展

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度から、右も左もわからないまま、このプロジェクトを引き継ぐことになったが、先輩方や先生方に協力を仰ぎ、無事活動を続けることができた。

白谷荘歴史民俗博物館調査事業では、月一回の定例調査をおこなうことによって、地道な作業ではあるが、確実に調査データの蓄積ができています。また、一回生のコアメンバーの積極的な参加により、整理作業や調査取りのペースは大幅に上がっている。しかし、博物館内の展示にまで手が回らなかったことが反省点である。博物館内の展示がずっと同じであると、展示のマンネリ化や展示品を傷めてしまう危険性もある。来年度は博物館内のこまめな清掃作業や展示品の変更をおこない、資料の保管方法にも配慮し、管理方法を考えていきたい。

奥伊吹調査事業では、泊まり込みの調査によってようやく1つの調査が終了したが、昨年度から計画していた民具の名称や使用法の聞き取りまで進められなかったのは課題である。今年度から始めた別地区での民具調査と並行して聞き取り調査をおこなっていききたい。奥伊吹にある、あと2つの地区での民具調査もこの事業内でおこない、最終的には東草野小中学校での展示を目指している。

昨年度までの課題として、外部だけではなく、学生にもこのプロジェクトの活動を知ってもらうことをあげていたが、湖風祭での出展や民俗映像資料上映会の告知などにより、少しは活動を知ってもらうことができたように思う。しかし、まだまだメンバーが増えないのが現状である。来年度には活動内容を具体的にまとめたリーフレットなどの作成、Facebook やブログを活用することによって、広報活動をより広げていきたいと考えている。

活動を通して学んだこと

活動を通して、普段の生活では触れる機会のないようなものに出会ったり、経験をすることができた。古文書などに触れ歴史を感じ、仲間や先生方とそれを読み解いていくこと。自分たちの活動を幅広い世代の方に楽しんでもらえるように企画すること。ここでしか味わえない、貴重な時間をすごすことができた。

井上日香理（地域文化学科1回生）

古き良き生活の姿を今に残す古文書や民具の調査・保存に携わり、これらの消えゆく文化を地域文化財としてこれからの世代に伝えるということの重要性をととも感じます。自分たちの手でこれらを守り、伝えるお手伝いができることが嬉しいです。今後も積極的に取り組んでいきたいです。

原知里（地域文化学科1回生）

地域博物館プロジェクトに入り、多くの経験をさせていただきました。特に9月に行った米原市甲賀の調査では、民具を集めるという作業をしました。そこでは、メモの取り方や、地域の人とのコミュニケーションの大切さなど、1年生の授業では、学べないような実践的な事を多く学べたと思います。

山田七帆（地域文化学科1回生）

地域博物館プロジェクトの活動を通して、その地域に生きた人々の痕跡に触れることで、現在の地域の在り方や発展について考えることが出来ました。また、博物館の展示の仕方や工夫を学ぶことが出来ました。そして地域の人々からお話を聞いた経験は、私の大きな財産になったように思います。

山本萌絵佳（地域文化学科1回生）

地域からのコメント（抜粋）

白谷荘歴史民俗博物館 川島光男さん

当館の資料調査に携わっていただき、調査・維持・保存に多大な御協力をいただき感謝しています。一般ボランティアの皆様も連携して継続し御協力いただいております。「これだけの資料（古文書・教科書・古民具等）を良く整理されましたな」と来館される方々がおっしゃってくださいます。PCによる資料整理・データ入力も進んでいます。今後は、地域の特色を活かした個性ある博物館にしていければと考えております。そして、様々な方法で県立大学の皆様に継続していただいている活動とともに当館の魅力を情報発信して広めていきたいと考えています。

指導教員より

人間文化学部 市川秀之

地域博物館プロジェクトは今年は1、2回生中心の活動であったが充実した内容で、また社会的にも認知が進んだ一年だった。例年つづけている白谷荘の活動は今年も欠かすことなく毎月継続し、博物館夏祭りでは展示やボランティアとして参加し、他の館からも普通の博物館として認識されるに至っている。また米原市では例年民具調査をしてきたが今年は甲賀地区で民家をまわり民具を探す作業も実施している。この活動は一般紙でも大きくとりあげられた。また収集した民具はその後も調査を継続し将来的には文化財指定が予定されている。このように今年の活動は社会性に富むものであったが、メンバーの人数はやや少なく、今後はメンバーの確保と経験やノウハウの継承が課題であろう。

DELIVERABLE

成果物／制作物



博物館夏祭用紹介パネル



民俗映像資料上映会チラシ

<その他成果物>

湖風祭用紹介パネル

湖風祭展示チラシ

05 BAMBOO HOUSE PROJECT



生きる自然は地域を育む！！

全国、どこにでもある放置竹林。この問題を地域の方々と学生が協力して解決しようという取り組みです。滋賀県湖南市菩提寺区の竹林で、竹林整備を行い、その際に出た竹廃材を再利用し、子どもや地域の方々が集まる憩いの場となることを目指します。

TEAM DATA

チーム名：BAMBOO HOUSE PROJECT

代表者：武政遼平（環境科学研究科）

メンバー数：41名

指導教員：陶器浩一（環境科学部）

活動場所：湖南市菩提寺

関係団体：菩提寺まちづくり協議会

近江楽座活動年度：(H16)(H17)(H18)(H19)(H20)(H21)(H22)(H23)(H24)(H25)(H26)(H27)

PROJECT

実施事業

- (1) 甲西北中学校でのプレゼンテーション
- (2) 竹林見学、たけのご堀り
- (3) 竹廃材の撤去
- (4) 環境学習講話
- (5) 竹林整備



竹林整備 (11/07)

- (6) 春ワークショップ
★見出し写真：春 WS 作業 (03/08)
- (7) まちづくりフェスタへのブース出展



まちづくりフェスタ (10/30)

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は、1年間を通して竹林整備活動を行うことができた。

まずバンブーハウスプロジェクトの活動を知ってもらうために、4月に甲西北中学校の全校集会にてプレゼンを行った。同時に生徒を募り、バンブーハウスの案内を行った。また竹林を訪れていた地域の方々と一緒に、中学生がたけのご堀りを体験することができた。6月には、竹チップ製作を学生も行き、竹廃材の再利用に努めた。

10月は、甲西北中学校の一年生の総合学習の授業の一環として、竹林整備を行った。中学生とプロジェクトメンバーと一緒に竹の間伐を行い、中学生には環境問題と絡め多くのことを学ぶ機会となった。授業という形で参加してもらうことで、多くの中学生が活動に興味を持ってもらうことができ、「一緒に遊具を作りたい。」などという声も多くあがった。

3月には、一週間のワークショップを行い、竹の伐採から、建築物のメンテナンス、子どもたちの為の遊具作り、竹ベンチ製作を行った。今回のワークショップでは、5年目の活動ということもあり、子どもたちが利用しても安全なように建築を補修し、維持していくことを大前提に活動した。新たに大きな建築を作るのではなく、竹林、設備を維持することと、人が集まることができる場作りに重きをおいてものづくりを行った。活動中、例年より多くの子どもたちが竹林に遊びに来る姿が見られた。

今後は竹林のサイン計画を行う予定である。今回の活動を通じて、「魅力的な場所がたくさんあるのに、初めて訪れた人にとってその場所性がわかりにくい。」という声があがったので、建物の名前とそこの楽しみ方、現在位置の把握、注意事項など情報を視覚化し、より多くの人が親しみを持てる場となることを目指していきたい。

活動を通して学んだこと (抜粋)

今年度は秋に地元の中学生と竹かりのワークショップを行った。地元の子どもたちと関わる機会が多かった。実際にバンブーハウスを利用している子どもたちがワークショップを通して竹林整備の意義を知る事は重要であり、学生だけでなく地元の方々とつくりあげていく事が大切だと感じた。

久保田由紀子 (環境建築デザイン学科 2 回生)

竹を使ってみんなの庭をつくる。そのために私たちは協力して生活をし、休憩には地域の方々と話をして、作業中には小学生が遊びに来る。お互いを知らなかった人々が竹の庭で出会い、関わりを持つ。そのような「つながり」を目の当たりにし、ものをつくる楽しさはもちろん、人との関わりを持つ喜びを感じた。

塚本健太 (環境建築デザイン学科 2 回生)

今回 3 年目の参加で、現場の指揮をとる役割を任された。限られた期間の中で工程を考え、後輩達に有意義な活動となるべく努めた。また、地域の方々との打ち合わせの席に初めて参加し、地域の方々の声や活動への想いを生で感じ、今までとは違った責任感を持って活動することができた。

本田山 成昭 (環境建築デザイン学科 3 回生)

地域からのコメント

湖南省菩提寺まちづくり協議会 地域活性化委員長 保田芳利さん

滋賀県立大学のバンブープロジェクトのメンバーが竹林整備とバンブーハウスやブリッジ他、施設の製作に取り組んでいただいたことで、荒れていた竹林が住民の憩いの場として生まれ変わり、地域住民の絆づくりの一助となりました。大変ありがたく感謝しています。これからも、地域住民と一緒にこの事業を継続してより充実させていくように、取り組んでいただければと考えます。

指導教員より

環境科学部 陶器浩一

活動を始めてから 5 年が経過した。

公に広報していないので、「知る人ぞ知る」場所になっているが、それがこの場所に相応しいと考えている。派手なイベントや一時の人集めはこの場所には必要ない。放課後に小学生が友達同士でふらっと遊びに来たり、お年寄りが孫を連れてきたり、休日には親子で遊びに来られたり、徐々に地域の場として馴染んできている。

今年度は、地元中学校との交流会など地域の方にこの場を知ってもらう活動も行った。

春のWSでは、傷んだ箇所の補修を中心に、場所の整備を行った。新しい構築はせず修理が中心の作業であったが、学生たちは熱心に取り組んでくれた。

当初「怪我をする可能性のある場所も多く、管理上問題がある」と否定的だった方も、WS終了後の点検立ち合いの際に「魅力的な場所がたくさんあるのに、初めて来た人にはわからないのがもったいない。場所場所にニックネームをつけるなど、子どもたちがワクワクするしかけをつくってはどうか」と、仰ってくれた。

地域と、学生と、お互い無理をせず、一緒に地域の場を守ってゆきたいと思っている。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



BAMBOO HOUSE PROJECT リーフレット



竹林見学会ポスター

<その他成果物>

環境講話成果物

竹林整備

06 座・沖島



沖島でまなぶ、まじわる、ささえる

日本で唯一の淡水湖の有人島・沖島。島民は漁業を生業に琵琶湖と共に暮らしてきましたが、過疎化などにより、暮らしの継承が危ぶまれます。このような沖島の状況に「学生も何かできるのでは?」と、自らの成長も目標に島の振興のため活動しています。

TEAM DATA

チーム名：座・沖島

代表者：久保瑞季（人間文化学部）

メンバー数：14名

指導教員：上田洋平（地域共生センター）

活動場所：近江八幡市沖島、学内

関係団体：沖島町離島振興協議会、沖島自治会

近江楽座活動年度：(H16)(H17)(H18)(H19)(H20)(H21)(H22)(H23)(H24)(H25)(H26)(H27)

PROJECT

実施事業

- (1) 島内祭りお手伝い

★見出し写真：春の大祭（05/03）

- (2) 沖島小学校行事、地域の方のお手伝い



遠泳大会（07/23）

- (3) 沖島写真展

- (4) ビジネスアイデアコンテスト出場

- (5) 湖風祭出店



湖風祭（11/12）

- (6) 沖島マップの作成

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度は島民に「座・沖島」を知ってもらうこと、そして学生が沖島をより深く理解することを目標に、お祭りの参加など島民との距離を縮めやすい活動を中心にしてきた。そのおかげか、徐々に「県立大の学生」「座・沖島」は認知されているように感じる。そういった意味で今年度の大きな目標は達成することができた。

初のイベント「沖島写真展」は島民から好評だったが、計画や仕事の負担割合、メンバーの参加率など課題が多かった。他の楽座プロジェクトとのコラボ企画もいくつかあったが、じっくりと計画を練れていなかったため、あわただしい場面がいくつもあった。予算面では大幅に予算が余ってしまったので、予算の使い方もしっかりと検討していく必要がある。これらの課題の主な原因の1つとして、メンバーでの十分な話し合いができていなかった事がある。試験や他のサークル活動で参加率が下がったり、情報の把握が不十分だった。次年度は事業ごとにミーティングをするのではなく、定例会を設けるという対策を考えている。沖島を長く支えるには、「座・沖島」がチームとして長く存続できるかにかかっている。来年度はチーム運営の基盤をしっかりと固めて、長く続くような楽座プロジェクトにしたい。

最後に、この1年間は島民と親しくなろうというスタートから「沖島写真展」という大きなイベントまで、メンバー全員で試行錯誤しながらなんとか活動を続けた一年だった。バラバラだったメンバーが少しずつチームになってきていると感じる。良かった点、悪かった点も踏まえながら、メンバー一丸となってこれからも沖島を支えたい。

活動を通して学んだこと

今年一年間、楽座を通して学んだことは、様々な人とのコミュニケーションの取り方です。同じ楽座に所属する人や地域の方など様々な立場の人と交流することで個々人に応じたコミュニケーションの取り方を学ぶことができました。また、広報の一部にも携わせていただき、情報発信の重要性も学びました。

柿佑爾（地域文化学科1回生）

イベントが周りの協力により実施されていることを、特に沖島小学校の遠泳大会から学びました。先生の監督のほか、漁師さんたちが船からの監視を行っていました。また保護者と卒業生が参観し、「エンヤコーラ」と泳ぐ小学生を鼓舞していました。主役の小学生以外の人の関わり方が重要だと実感しました。

杉浦良樹（地域文化学科3回生）

沖島には独自の文化や伝統、人のつながりがあることがわかった。ブラックバスを使用したよそ者コロッケがあること。代々続いて来た祭事を今も大切に続けていること。風景だけではなく島民と島民の繋がりが訪れた人の心をうつこと。それらに触れることができ、とても嬉しいです。

村林里恵（生活デザイン学科2回生）

地域からのコメント（抜粋）

沖島ファンクラブ「もんで」いっぶくどう店主 小川ゆかりさん

はじめての活動「沖島写真展」が、島民の声からはじまり皆さんが企画して開催できたことは、島民もメンバーの皆さんも想いを一つに出来たイベントになったと感じます。

写真展やお祭り等を通して皆さんが沖島の中に入って来てくれたことは、煌めきと共に島民に希望と喜びを与えてくれたのではないのでしょうか。メンバーの皆さんありがとうございます。島民の想いを理解しようと努めながらの活動は、沖島のみんなも嬉しく、頼もしく映っているようです。来島される毎に座・沖島のみんなは「沖島の子」になっていきます。沖島のみんなが待っています。

年度中に1回生多数の方が加入との嬉しい報告もいただき、来年度はどんな輪が広がるのか？楽しみにしています！

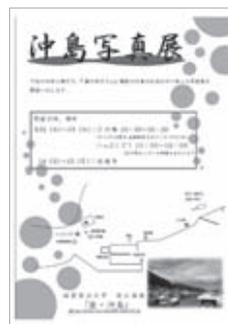
指導教員より（抜粋） 地域共生センター 上田洋平

さすががしき無鉄砲

「まなぶ」「まじわる」「ささえる」という3つの方針のうち、今年は前2つに焦点を絞り、地域のふところに飛び込んで、「まずはなんでもやってみよう」の精神にあふれた活動ぶりだった。ヨソ者である学生が地元の人と共に神輿を舁く姿は、十年前の沖島では考えられないことであった。それだけ信頼を勝ち得たということだが、それだけ島の状況は切迫しているということでもある。いわゆる「バカ者」としてのさすがしい無鉄砲さが、コワモテの漁師にかえて愛されている。学生にしかできないコミュニケーションの仕方、地域の思いをひきだして、「ささえる」活動につなげてほしい。ソーシャルビジネスのアイデアコンテストではグランプリ。アイデアの実現を目指して欲しい。なにより、代表が「沖島に住む」ことを決め、宣言したのにはたまげた。来期、彼女を超える御転婆や豪傑が出現しないようなら、支える仲間はまだしばらく巻き込まれていくしかあるまい。それも善き哉。漁船通学となれば前代未聞。とりあえず、大学前に港はある。

DELIVERABLE

成果物／制作物



沖島写真展チラシ

07 人と環境を救う雨水タンク



雨水タンクは地球を救う！

プラスチックの成形技術を用いて、廃プラのリサイクルをテーマに活動しています。リサイクルプラランターに続き、雨水タンクの開発を行っています。企業や就労支援施設と連携した hana-wa 活動や清掃活動にも参加し、地域との繋がりを大事にしています。

TEAM DATA

チーム名：廃棄物バスターズ
代表者：森田康揮（工学研究科）
メンバー数：14名
指導教員：徳満勝久（工学部）
活動場所：彦根市内、大津市、その他
関係団体：コダマ樹脂工業株式会社、エコパレット滋賀
近江楽座活動年度：H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26 H27

PROJECT

実施事業

(1) 雨水タンクの開発

(2) hana-wa 活動

★見出し写真：ぼぼハウスリサイクルランター提供 (09/16)



サービスエリアランターメンテナンス (02/21)

(3) 荒神山清掃

(4) HIKONE キレイ隊



よさこい祭り警備活動 (06/19)

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

メインのプロジェクトである雨水タンクについては、目標であった試作までは至りませんでした。試作の依頼、またその試作の条件に合わせた試料の作製の用途は立ちました。来年度は、雨水タンクの試作を行い、実際に使っていただけるようにPRも活動も行っていきます。

hana-wa 活動については、以前からつながりのある障がい者の就労支援施設に加え、彦根市の障がい者施設にも活動の幅を広げました。今後も活動をより知っていただけるように、フィールドを広げていきたいと考えています。また、今年度も活動の参加回数が少なかったことが反省点であるため、雨水タンクのPRのためにも参加回数を来年度は増やしていきたいと思います。

そのほかの活動である荒神山周辺の清掃活動や、彦根市内の清掃活動への参加は、今後も継続していきます。このような以前よりお世話になっている地域の方にも雨水タンクのことを知っていただき、地域の近いところから雨水タンクを広めていけるような活動をしていきたいと思います。

活動を通して学んだこと (抜粋)

雨水タンクの実寸大の試作を作っていただける企業を探すのに苦労した。その反面、モニターはいくつが集まり、製品化までの道のりを準備することができた。会計の仕事を通して製品化の難しさを痛感した。また、荒神山や宇曾川清掃に参加し、環境問題はゴミだけでなく、外来植物の影響もあることも知った。

柴崎和樹 (工学研究科材料科学専攻 1 回生)

雨水タンク実物大の試作には至らなかったものの、雨水タンクを宣伝するメディアの確保であったり、外部交流による様々な意見を頂き、ただ試作を目指すだけではモノづくりは出来ないと考えた。様々な面を考慮し物事を進めることを学んだ。

宮原和美 (工学研究科材料科学専攻 1 回生)

今年度は雨水タンクの試作に難航し、改めてモノづくりの難しさを感じました。また、地域との新しいつながりも増え、これまでの人との人とのつながりも大切ですが、その輪を広げていくことも、活動の拡大に向け重要だと感じました。

森田康揮 (工学研究科材料科学専攻 1 回生)

地域からのコメント (抜粋)

社会福祉法人いしづみ会障害福祉サービス事業所いしづみの家

職業指導員 西村隆志さん

廃棄物バスターズと PCR (ペットボトルキャップリサイクル) 作業所連絡会との協働活動も早いもので7年が経過しました。最近では小学校を中心に学校からの回収が増加しており私たちの活動が地道に広がっていることを実感しています。

特にバスターズには新たな製品・企画の提案などを柔軟な発想力でしてもらい、重要な役割を担ってもらっています。

HIKONE キレイキャンペーン隊 事務局長 馬場和子さん

彦根を訪れてくださる方を気持ちよくお迎えしようと、駅前花壇の整備やお城通りの清掃活動、ポイ捨てを拾うことで啓発を行なう。そんな地味な活動を続けて 10 年。廃棄物バスターズの皆さんは厭うことなく参加し、協力してくださいました。

小さなことでも続けていくことで、何かが生まれ何かが変わることを、身を以って経験して下さったのではないかと思います。

指導教員より (抜粋)

工学部 徳満勝久

学生たちが目標とした「地域分散型治水ダム」製造に向けた取り組みに対しては非常に苦労した年でもあったが、今年度はその目途が漸く立ったという印象である。自分たちで調べる努力や外部協力者の支援も得て、やっとその製造実験ができるまでに漕ぎ着けたのが今年の成果であろう。

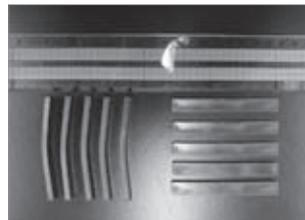
廃棄物バスターズの地域貢献活動については、“hana-wa” 活動の継続的実施、地元ボランティア団体と共同で彦根市内の港湾部、駅前部の美化活動、彦根キレイキャンペーン隊と合同で、「ゆるキャラ祭り」や「よさこい祭り」など、彦根市内でのイベントのサポート等、今年度も“地域での地道な活動”を継続して実施してもらった。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



雨水タンク製作のための材料評価実験
純プラ / 廃プラ / 相容化剤を熔融ブレンドしたもの



雨水タンク製作のための材料評価実験
力学物性評価のための試験片

08 信・楽・人 -shigaraki field gallery project-



信楽の隠れた良さを再発見！

信楽町長野地区、信楽焼を製造している窯元が多数ある窯元散策路と呼ばれる焼き物のまちで、改修作業や散策路の問題解決、イベントの参加や各種企画など、ここでしかできないことを学生自らが提案し活動しています。

TEAM DATA

チーム名：信・楽・人 -shigaraki field gallery project-

代表者：古長美蘭（人間文化学部）

メンバー数：9名

指導教員：印南比呂志（人間文化学部）

活動場所：信楽窯元散策路、甲賀市信楽町

関係団体：信楽窯元散策路のWA

近江楽座活動年度：(H16)(H17)(H18)(H19)(H20)(H21)(H22)(H23)(H24)(H25)(H26)(H27)

PROJECT

実施事業

- (1) 湖風祭での陶器小物製作・販売

- (2) 商店街ポップ制作

★見出し写真：ポップ設置（09/27）

- (3) 窯元パンフレット制作



インタビュー（08/09）

- (4) 植木鉢製作



植木鉢作成（08/10）

- (5) お茶会 窯元 DE アートな野点の手伝い

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年の活動の成果は主に2つあると考えていて、一つは、ポップ制作のおかげで今まで関わりのなかった商店街の方々やまちなか芸術祭実行委員の方と知り合うことができ、信楽人の活動を認識してもらうことができたことだ。この活動では、商店街を通る人にポップに興味を持ってもらい商店街に目を向けてもらうことができ、商店街の方にも喜んでいただくことができた。2つ目は、ここ数年は数件としか直接関わりのなかった窯元さんだが、パンフレット制作を通してすべての窯元さんに深くお話を伺うことができ、窯元さんたちに信楽人を身近な存在として認識していただくことができたのではないかと考えている。私たちも窯元さんの人柄を知り、貴重なお話から多くの刺激を受けることができた。また、活動を通して、50人以上にインタビューを行ったので、地域の実情を知るとともに、インタビューの要領をつかむことができ、今後の活動に生かすことができると考える。

課題としては、ポップ制作など現地で活動したことがどのような成果を上げているかを実際に確認する機会をあまり作れなかったため、信楽に行く機会をもっと増やせるといいと思う。また、パンフレットの初配布は次年度のぶらり窯元めぐりでを行い、その後もギャラリーなどにおいてもらう予定だが、そこで観光客に効果的に利用してもらうため、配布方法などを考えていかなければならない。

活動を通して学んだこと

様々な団体の方と一緒に活動させていただく中で、全員が理解し行動することの難しさや、多くの人と関わる楽しさを学ぶことができた。まちなか芸術祭のインタビューでは、回数を重ねていくことで、話を引き出すコツをつかみ、話を聞くことがとても楽しく感じ、信楽の魅力をより知ることができた。

中島優（環境建築デザイン学科2回生）

インタビューで普段は聞くことができないお話や、仕事への姿勢などを聴くことができ、貴重な経験となった。文章や写真を扱う機会が多く、苦労したことも何度かあったが、見る人にとって伝わりやすいものを目指して制作することができた。メンバー全員で考える機会も多く取れたのでよかったと思う。

加藤彩香（生活デザイン学科3回生）

活動を通して軸を持つことの大切さを学びました。まちなか芸術祭の活動でも、パンフレット作りでも、どのような人に伝えたいかや、どんな印象を持ってほしいかなど様々なことを考えているうちにプレそうになりましたが、メンバーが軸を持っていてくれたので進めて行くことができました。

山本彩乃（生活デザイン学科3回生）

地域からのコメント（抜粋）

窯元散策路のwa代表 奥田泰央さん

今年度も「信楽人」さんの皆さんには、色々と信楽の事でお手伝い頂きありがとうございました。

ほぼ一年も前になりますが、「ぶらり窯元めぐり」(観光客さんだけでなく地元の方も、信楽の窯元を周って楽しんで頂きたい町歩きイベント)では、窯元のみでは大切なインフォメーションを設置するのが難しく、そんな所を担当していただき大変助かりました。

秋には「信楽まちなか芸術祭」を企画し無事終わりましたが、その中で信楽の商店街さんの皆さんとポップを作ったと聞いております。

また信楽人さんの企画としてハンコを作るワークショップや窯元パンフレットの制作など自分達での活動もあり、今後の皆さんの成長もすごく楽しみに感じております。

「信楽人」のみなさん。今後もよろしくお願ひします。これからも頑張ってくださいー、応援しております。

指導教員より

人間文化学部 印南比呂志

今年度は、信楽という街に密着した活動に重点を置いていた。今年開催された「まちなか芸術祭」の期間中、信楽商店協同組合と協力して、30ある商店の情報発信となる企画を多く立ち上げて支援を行なった。このための商品調査や店主へのインタビューなど、かなり多くの作業を夏休み期間中に行なった。また芸術祭の期間中も企画イベントに参加するなど精力的に活動していた。窯元散策路イベント用に、陶器産地としての情報発信のためのパンフレット制作も担当した。22の窯元の人、物、環境含めた魅力ある情報ツールを制作した。

編集デザインなど、専門とする学生たちの力が発揮されていた。これまで陶器産業界との繋がりがメインであったが、異業種の商店街などとの協働で、滋賀県立大学の学生活動を信楽の人たちに一層深く知ってもらうことができたように思う。

DELIVERABLE

成果物／制作物



窯元手帖



陶器小物

<その他成果物>

植木鉢

商店街ポップ（まちなか芸術祭）

09 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト



人のため 自分のための ボランティア

障がい有する人と学生が互いに成長することを目的に、NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディーの支援活動を行っています。活動を通じて、障がい児・者を支える地域づくりを推進することも目指しています。

TEAM DATA

チーム名：ボランティアサークル Harmony

代表者：田崎里沙（人間文化学部）

メンバー数：32名

指導教員：竹下秀子、杉浦由香里（人間文化学部）

活動場所：彦根市、東近江市、学内

関係団体：NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー

近江楽座活動年度：H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26 H27

PROJECT

実施事業

(1) 定例活動

★見出し写真：定例活動 油絵（10/22）

(2) 宿泊体験

(3) クリスマスコンサート



クリスマスコンサート K'crew による演技の鑑賞 (11/26)

(4) キャンドルづくり体験

(5) おとくらプロジェクト× Harmony ～作品展示会～

(6) カヌー体験



カヌー体験 (09/10)

(7) 66 祭り (愛荘 66 かまど祭)

(8) 芋ほり体験

(9) 定例会議

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度の活動の成果は、学生が主体的に考えて行動することが増えたことだと思います。

次に、定例活動のポリフという工作活動では、試行錯誤を繰り返していくうちに、最近ではカラフルなデザインのものをつくるようになり、作品といえるものができるようになってきました。また、子どもたちの描く油絵においても上達がみられました。例えば、最初は、黒の線のみでキャンバスを色づけていく子どもがいましたが、最近ではモデルの野菜や果物と同じ色を用い、線ではなく物を描くことができるようになりました。このような変化が生まれた理由は、今年度から子どもと学生のペアを毎回一緒にするように設定したことで、双方の信頼関係が生まれたからだだと思います。「こうしてみたら」「これを描くんだよ」など、学生や先生のアドバイスに耳を傾けるようになり、良いところはどんどん褒めていくことで、子どもたちは伸び伸びと描くことができるようになったのではないかと考えます。

課題は、活動に積極的に参加する学生が少ないため、一人の負担が大きいことです。普段活動に参加することが難しい学生のために、活動の内容を把握して積極的に参加することができる体制を整えておくことが必要だと考えられます。例えば、それぞれの活動マニュアルを作ることが挙げられます。また、全ての活動において常に「活動して終わり」という状況になっており、学生全員でしっかりと反省や振り返りを行う機会を持っていないことも今後改善する必要がある課題です。この改善に向けて、当日の活動終わりに学生で集まり「気づいたこと・良かったこと・反省点+どのように改善していけばよいか」等の項目のある「反省カード（仮名称）」に学生一人一人が記入して後日その内容をまとめ、次の活動日の活動前のミーティングの時に学生間でフィードバックする機会を持つようにしていきたいと考えています。

活動を通して学んだこと (抜粋)

障がいをもつ人との関わり方を学びたいと活動に参加しました。先輩たちの子どもたちとの関わり方を見て、障がいをもつかではなく子どもには個性がありそれぞれの個性にあった関わり方が必要だと思いました。障がいを持っていても持っていなくても関わり方は関係なく自分自身楽しむことが大切と学びました。

石橋穂波 (人間看護学科1回生)

何かボランティアをしたいという思いでこの活動に参加しました。まだ参加した回数は少ないので接し方がつかめていないのですが、これからそれを学んでいこうと思いました。また、毎回の活動で参加者の方々が皆楽しそうにしているのを見て、さらに楽しんでもらえるよう支援できたらいいなと思っています。

大内花菜 (人間看護学科1回生)

最初はどのように接したらいいのか分からず自分からはなかなか子どもたちに話しかけることができませんでした。活動を通してだんだん子どもたちと笑顔で接することができるようになり楽しいと感じるようになりました。これからの活動を通してもっと子どもたちと仲良くなりしたいと思います。

島田彩花 (環境生態学科1回生)

私は、子どもに対して苦手意識を持っていてそれを克服したいと思い子どもと接する機会のあるこのサークルに入りました。先輩や大人の方にアドバイスをもらったりサポートして頂き、今では子どもをみる責任というものも感じつつ子どもと一緒に私自身も楽しんで活動することが出来ていると思います。

保井綾華 (環境生態学科1回生)

地域からのコメント (抜粋)

NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー 田井中雅子さん

メロディーには、重度から中度の知的障害を伴う自閉症やダウン症の子どもたちがいます。皆、それぞれにコミュニケーションに問題を抱えており、言葉での理解より、目で見て体験して理解することを得意とし、何度も繰り返すことで、習得していく子どもたちです。

月例活動以外にもイベントとして、BBQ パーティーやお泊り会、カヌー体験、作品展示会、芋ほり、キャンドル作り、クリスマスコンサートと家族だけでは、できない経験を沢山させていただいています。学生さんたちの人間関係の広がりから活動の幅も広がり、子どもたちが自分の世界を持てる環境を提供してもらえる事は、非常に有り難く感じています。

メロディーとの活動を通して、障害のある子どもと関わってくれたハーモニーをはじめとする学生の皆さんが、地域に出た時、メロディーとの活動から得た経験と知識を活かして、地域で生活する障害者を地域で支える人になっていてもらいたいと期待しています。

指導教員より (抜粋)

人間文化学部 竹下秀子

Harmony は、14 年間にわたり活動を継続させてきた。当初は小学生だった子どもが学生よりも年長の成人となっている。障がいゆえの困難が加わり、ご家族の方には苦勞の多い年月だったに違いない。ご家族の心に寄り添い、子どもたちの思いに向きあいながら、Harmony は今年度も活動できたのだろうか。ご家族と子どもの暮らしの旋律に調和して、豊かな時間を共有することができたのだろうか。

これまでの実績の継承と新たな価値の付加に努めてとりくまれた今年度の活動は、ひとまず、全体としては充実したものだったと評価したい。

主催イベントの他、学内の諸団体との新たな連携にも率先してとりくんでいる。年々、他団体からシェアしてもらう知的、物的資源は多様になり、人的な交流によって得られる子ども、保護者、学生の経験の質も豊かになってきた。今後もさまざまな交流を学生の主体性によって拓き、本プロジェクトの価値を高めていってほしい。将来に向けては、子どもたちの生涯に寄り添うパートナーとして Harmony が機能するようになることを、その歩みを前進させていくことを期待したい。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



クリスマスコンサートパンフレット



クリスマスコンサートポスター



おとくらプロジェクト × Harmony
～作品展示会～チラシ

10 未来看護塾



地域に根ざした活動でみんなが健康に

子どもや高齢者、障がいの有無に関わらず、地域の方々を対象に心も体も健康になってもらえるよう活動しています。様々な人とのふれあいの中でコミュニケーション能力や健康についての知識など、将来に必要な力を自然に身につけていきます。

TEAM DATA

チーム名：未来看護塾
代表者：櫻井麻衣香（人間看護学部）
メンバー数：51名
指導教員：伊丹君和、仲上恵子、川端愛野（人間看護学部）
活動場所：彦根市、宮城県南三陸町歌津地区田の浦
関係団体：NPO法人ぼぼハウス、彦根市立病院、城南保育園
近江楽座活動年度：H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26 H27

PROJECT

実施事業

- (1) 彦根市立病院まつり「ちびっこ広場」
- (2) 荒神山で小学生と遊ぶボランティア
- (3) 湖風夏祭・湖風祭での「ちびっこ広場」
- (4) 森の子保育園夏祭り
- (5) 野瀬町地藏盆
- (6) 野瀬町長寿会への参加
- (7) ビバシティ彦根
「応援!生き活き健康生活!」
★見出し写真：ビバシティ ちびっこ広場 (02/21)
- (8) 宮城県南三陸町
「いきいき健康交流ひろば」



足浴 (09/25)

- (9) 彦根市立病院で節分お楽しみ会のお手伝い
- (10) ぼぼハウス主催のイベント参加

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

一番の成果は宮城県南三陸町での「いきいき健康交流ひろば」のイベントが成功したことにより、参加メンバー全員が達成感を得ることができたことである。今回のイベントでは上級生の助けも借りて、より良いものをつくることができた。毎年楽しみにしている方もたくさんおられたことから、5年目になるこの活動が浸透してきていると感じた。震災の体験談なども聞くことができ、現地の方々と深く交流でき、“祖父母と孫”のような関係を築くことができた。このような被災者支援においては、相手の話を傾聴の姿勢で聞き、ハンドマッサージや足浴によって癒しを与えるなど私たち看護学生だからこそできる支援の仕方があると思う。だからこそ今後も、未来看護塾と宮城県南三陸町田の浦との交流を継続し、活動を続けていきたいと思う。

普段の活動には、ミーティングで呼びかけたり、参加の意思はあるができていないメンバーに声をかけ、一緒に連れていくようにし、参加率の低下を防ぐように心掛けた。しかし、毎年の課題としても出ている通り参加率の減少がみられる。人数が少ないことにより、縦の繋がりが強くはなるが、今後には生かされる経験を多くの学生に経験してほしい。その改善のために、みかん通信などの広報面の強化を行ったり、SNSを利用し活動で得た学びを共有し、活動に参加することの意義をメンバー全員に知ってもらうようにすることを行った。

その他、活動記録としてあまり写真を撮れていなかったため、活動ごとに記録係を設け、写真を残すようにしたい。またブログをあまり更新できていなかったため、活用するように心がけたい。そうすることで私たちの活動を多くの人に知ってもらうことができるだろう。

活動を通して学んだこと

さまざまな年代の方と関わることで、コミュニケーション能力を養うことができた。また、未来看護塾と施設の架け橋の役目をする中で、正確で簡潔な情報のやりとりがいかに大切なことがわかった。

小幡泰花（人間看護学科 2 年生）

日々のボランティアへの参加はあまり出来なかったが、大きなイベントでは様々な年齢層の方と関わらせていただいて、人との関わり方を学ぶ貴重な経験ができた。自分たちで決めて、実行するという難しさがあったが、今後も必要になってくと思うので経験できてよかった。

櫻井麻衣香（人間看護学科 2 年生）

さまざまな年齢や個性をもった人びとと関わらせて頂くことでコミュニケーション力だけでなく、気遣いの心であったり、人間性も磨く（養う）ことができた。特に子どもたちから素直なレスポンスを受けることで自信に繋がった。

吉田健太（人間看護学科 2 年生）

地域からのコメント

特定非営利活動法人 NPO ぼぼハウス 三上光世さん

未来看護塾の皆さんには大変感謝申し上げます。私たちとは違う若い世代として、子どもたちの心に寄り添いながら、時には憧れのおにいさん・おねえさんという姿を見せて下さったり、お友達のように一緒に遊んでくださったりしています。これからも子どもたちの成長をいっしょに見守っていただけると幸いです。

指導教員より（抜粋） 人間看護学部 伊丹君和

未来看護塾は結成以来 13 年間途絶えることなく、「近江楽座」プロジェクトチームとして活動を継続しています。しかも、発展・拡大しながら・・・まさに、「継続は力なり」です。

13 年間のなかには、メンバー数が減少したり、活動が休止状態になったり・・・という時期もありました。しかし、活動を継続できているのはなぜだろう？それは長い年月で培ってきた地域との関係性にあると思います。活動が途切れそうになると、地域の方から未来看護塾を心配して声をかけてくださる・・・まるで近所に住んでいるおばあちゃんのように。本当にありがたいです。

少子高齢社会の今、地域では高齢者さんや子育て中のお母さんたちが心と身体の健康について相談できる仲間をますます求めておられます。また、いつ起こるか分からない災害への対策をはかる必要もあります。そのためにも、地域のネットワークを拡大していくことが大切です。未来看護塾はそのような地域課題を少しでも解決できるよう、これからも親戚のようなおじちゃんおばちゃんのように温かな地域の皆さまの支えのなかで、さまざまな活動を企画し取り組んでいることと思います。

学生の教育効果と地域貢献の両者が結びついた「近江楽座」、そして「未来看護塾」の益々の発展と継続を望むとともに、これからも支援していきます。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



みかん通信 2016 Vol.1



みかん通信 2016 Vol.2

11 とよさらだプロジェクト



ひとり刈りいこうぜ！（野菜）

豊郷町の耕作放棄地で、地域の方にアドバイスをいただきながら野菜づくりを行っています。栽培した野菜の直販所、大学生協への販売、イベント出店を行い、地産地消の促進をめざしています。

TEAM DATA

チーム名：とよさらだ

代表者：神野高志（環境科学部）

メンバー数：19名

指導教員：増田佳昭（環境科学部）

活動場所：犬上郡豊郷町、彦根市八坂町

関係団体：豊郷町役場

近江楽座活動年度：H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26 H27

PROJECT

実施事業

- (1) ビニールハウスの張り替え

★見出し写真：ビニールハウス張替え（09/17）

- (2) 豊郷町での野菜作り

- (3) 農家さんのお米作り



田植え（05/06）

- (4) サツマイモ掘り in 豊郷



サツマイモ掘り（11/16）

- (5) 湖風祭参加

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度の成果として、メンバー間で連携のとれた活動を行えるようになった。前年度と比べ、坊ちゃんカボチャの県大内での栽培、試食会などメンバーの意見を尊重した活動を展開した。また、ビニールハウスの張替えなど新しいことへの挑戦も行った。ビニールハウスの張替え、お米作りなどメンバー間だけでなく、地域の方の協力のもと活動を行うことができた。

反省点として野菜の継続的販売が出来なかった。大学生協の食堂で栽培したトウモロコシの販売、学園祭での出店を行ったが、直売所で野菜を販売するという機会は少なかった。

理由として大学近くで管理していた圃場がなくなったことが考えられる。豊郷町での作業は週に1、2回であったのに対し、大学付近の圃場ではほぼ毎日作業できていたため管理が容易であり、野菜の栽培も比較的自由に出来ていた。そのため、野菜の栽培量が下がる、試験的な野菜の栽培の難化といったことが起きた。栽培に関する知識の不足、栽培経験のない野菜の栽培により野菜の収量や収穫時期を正確に把握することが出来ず、販売に踏み切れないという問題も発生した。

野菜の販売には地域の活性化やとよさらだのPR、野菜栽培における知識の習得など様々なメリットがあると考えられる。衛生管理や市場の把握も必要となり、容易に出来ない事業ではあるが、栽培について勉強会を開く機会を設ける、近隣農家とのコミュニケーションをとり野菜の販売に関して助言をもらおうといった取り組みをし、精力的に販売を行っていきたい。

今年度は豊郷町内のイベントに参加できなかったことなど地域との交流が不十分であったと感じる。来年度は積極的に地域のイベント等に参加し地域との連携を深めていきたい。

また、今年は入部希望者が前年に比べ多かった。来年度も入部希望者が増やせるようにとよさらだの宣伝も含め活発に活動していきたい。

活動を通して学んだこと

活動を通して、野菜を作ることも学べたがそれより地域との交流というものが一番であった。作業の手伝いをしていただく中でどのような方がどのようなものを作っているのかということの一端を知ることができた。この繋がりを生かし、地方創生に繋がられる方法を自分たちで考えていけたらと思う。

小林大輝（環境生態学科1回生）

活動を続けて野菜作りは勿論のこと、地域の人との交流の大切さを学びました。野菜作りは始めたばかりの私は知識や経験、技術力もないので上手にいかないこともありました。地域の人々に指導・協力していただき、その度に、この活動は地域の人の協力のもとに成り立っているんだと強く感じました。

堀口実紀（生物資源管理学科1回生）

活動を通じて学んだことは、野菜作りを通してメンバー同士だけでなく、地域の人々と関わることの大切さである。工夫した農作業のやり方を教えていただくなどの「受け取る」側もちろんだが、できた野菜をおすそ分けすることや、お手伝いをするなどの「お返し」側としても関わられたと思う。

山本涼香（地域文化学科1回生）

地域からのコメント

かよちゃんファーム代表 中島加代子さん

とよさらだは農業をしたことないような若者たちが野菜作りに取り組んでいる。わからないなりに地域の人たちとコミュニケーションをとり、土に触れ、野菜で地域と交わっている。

野菜の出来不出来は関係なく、若者が興味を持って活動してくれることは嬉しい。将来、この活動を通して農業でなくても、地球環境に関わるようなことを行なっていくてほしい。

指導教員より

環境科学部 増田佳昭

昨年度に較べて、より計画的にまた積極的に活動に取り組んだと思われる。とくに、メンバー間の意見を尊重する風土ができてきているようであり、情報の共有と意思形成が相対的にスムーズにできるようになったのではないかな。

ビニールハウスの張り替えは懸案事項であったが、地元の農家のご協力を得て無事に完成した。指導いただいた方には大変お世話になったが、学生も学ぶことが多かったのではないかな。こうした関係は引き続き大事にしていきたい。

「県大ファーム」に保育園が建設されたことで、日常に管理できる圃場が縮小した。そのために活動の幅が狭まったのではないかなと思う。豊郷町の圃場は遠く、自転車で通うなど大変苦労して耕作しているのが現実である。自動車をもつ学生も少なく、また、自動車事故の心配もある。自家用車をもつ学生に依頼するなら自動車保険等の手当が必要であり、それが困難なら県立大学に近い圃場の確保が課題と考えられる。どう対応するか、知恵を集めたい。

野菜や米の栽培を通じて、土と触れて技術を学ぶだけでなく様々な人々と関わるができる。今後とも頑張ってもらいたいと思う。

DELIVERABLE

成果物／制作物



トウモロコシ販売宣伝チラシ



トウモロコシ、玉ねぎ、サツマイモ、人参
山田ねずみ大根等の野菜(写真：坊っちゃんカボチャ)

<その他成果物>

ビニールハウス
新入生勧誘ポスター

12 八坂町プロジェクト



つなぐ、はっさか・すまう、わんさか

大学が位置する八坂町の空き家の改修を行っています。改修した古民家は学生のシェアハウスにする予定です。イベントなども行い、学生と地域とのつながりをつくり、新たなコミュニティを形成していきます。

TEAM DATA

チーム名：八坂町プロジェクト
代表者：戸倉一（環境科学部）
メンバー数：25名
指導教員：永井拓生（環境科学部）、上田洋平（地域共生センター）
活動場所：彦根市八坂町
関係団体：八坂町自治会

近江楽座活動年度：(H16)(H17)(H18)(H19)(H20)(H21)(H22)(H23)(H24)(H25)(H26)(H27)

PROJECT

実施事業

- (1) 八坂町あるき
★見出し写真：八坂町あるき (05/15)
- (2) 八坂百均市



八坂町百均市 (06/19)

- (3) 八坂建築発見工房
- (4) ピザ釜 WS



ピザ釜 WS (07/10)

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

前期は月に一回程度でイベント開催し、プロジェクト全体でそれぞれが自発的に企画を発案したりしてすすめることができた。八坂町プロジェクト独自のクエストシステムにより、決まった人が毎度イベントを開催するのではなく、思いついた人がしてみたいことをするという流動的な動きができよかった。実際に前半期に行った「湖風祭出店」、「八坂まちあるき」、「八坂百均市」、「ピザ釜づくり」はすべて違う人がリーダーとなり、運営することができた。また、イベントなどを行うことによってまちの人の話を聞くことができ、まちの暮らし方の知恵や何を必要としているか、まちの歴史なども知ることができた。これらの情報は学生たちの興味を引くとともに、実際に設計にも生かすことができ、設計の幅が広がった。まちの人にとっても学生がまちに入って様々な活動を行うことで、非日常なおもしろいこととして興味を持ってもらえたのではないだろうか。実際、まちの人たちからも「学生や若い人が近所でこのような活動をしてくれると賑わいがある良いな」という声も聞くことができた。しかし、設計活動の方面は耐震診断待ちや案の練り直しがうまくいかず、あまり進めることができなかった。

後期はそれらのことをふまえ、イベントより、設計活動重視で進めることとなった。前期よりもイベントの回数が少なくなったのは残念なことだった。しかし、それにより工務店や不動産の方とのやり取りは進んでいった、実施のプロジェクトということで予算内に収めることがネックとなり、何度もスタディを重ねることとなった、しかしそれによって得られた学びは大きいと感じる。これからもこのプロジェクトは続いていくが、現実の予算に収めつつ、どのようにして、まちの需要や、自分たちのしたいことをしていけるかが重要であり、おもしろいところだと感じた。

活動を通して学んだこと (抜粋)

設計活動だけでなく、イベントを通して地域の方と関わることが、ここでしか体験できない活動でした。時間をかけ、そこで活動していくからこそできるつながりや発見、気づきがこのプロジェクトのおもしろい点だと思います。今後も実現へ向けて、取り組んでいきたいと思っています。

小野美香 (環境建築デザイン学科3年生)

今年度プロジェクトの代表をして、学生主体のプロジェクトの難しさを多く学んだ。設計をすることは、実際に自分の足で外に繰り出し地域に住まう人の顔を見ることで初めてそこに豊かなモノやコトを創れるのだと実感した。同時に情報伝達が上手くいかず自分のふがいなさも実感した1年であった。

戸倉一 (環境建築デザイン学科3年生)

今年は案を考えるだけでなく、工務店や設計事務所の方々と会議を重ね、具体的にプロジェクトを進めていく事ができた。決まった金額に納める事や工法、素材など考えなければいけないことは沢山あり、授業だけでは学べない、実際にもの作りをする事の難しさや楽しさを知ることができた。

山中佐織 (環境建築デザイン学科3年生)

地域からのコメント

アルツデザイン事務所 小林広美さん

設計演習と違い、実施設計は短期間で様々なことが進んでいきます。そのスピード感にびっくりされていると思います。私も働き始めてびっくりしています。

学生の間でこのような環境下でプロジェクトに参加出来ているのが羨ましく思います。完成までに現場で働く様々なプロとの出会いがあります。様々なことを吸収していただけたらと思います。良い建物が完成するよう頑張ってください。

指導教員より (抜粋)

環境科学部 永井拓生

活動が始まって約2年半となるが、当初、改修可能な物件がなかなか見つからなかった。町には空き家が増えてきているものの、広いエリアが市街化調整区域であるため、それらのほとんどがシェアハウスへの転用が不可能だった。しかし、約1年前に、市街化区域内に長らく空き家状態となっていた古民家(0邸)が見つかり、持ち主との相談の後、改修に向けて様々な活動をさせていただき至っている。

本年度は内部の清掃や実測、さらに数回にわたり学生が主催するイベント(八坂百均市)等が行われた。また、改修工事に向けて、学生間で積極的な地域リサーチ、設計案のスタディが行われ、ようやく理想とするシェアハウスの具体像が見えてきている。

学生がこの民家を中心に活動するにあたっては、持ち主や世話役の方を始め、八坂町の方々が暖かく見守ってくれたこと、様々な支援を頂いたことに深く感謝したい。こうした地元の方々の応援は、八坂町で新たな試みを行おうとする学生に対し、大いに励みになったことに違いない。また、活動への期待も感じたことであろう。学生には、大学の講義や課題に日々追われる中、これまで活動を続けてこられたことに深い敬意と感謝を表したい。現実化に向けて、シビアなコスト調整と幾度にもわたる設計変更を余儀なくされる中、大変粘り強く取り組んで頂いた。

来年度はいよいよ、本格的に改修・建設工事がスタートする。地域の皆さん、学生の皆さんの夢が実現していくことに間近に接することができるのは、幸福の一言に尽きる。楽しみに見守りたい。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



八坂町百均市チラシ



八坂建築発見工房ポスター

<その他成果物>

設計スタディの模型

13 たのうらまちづくりプロジェクト



滋賀と東北をつなぐ窓口に

東日本大震災の被災地である宮城県南三陸町の田の浦という地区との交流活動を行っています。海の大運動会などのイベントの企画・実施を支援するとともに、毎月、定期訪問を行い、震災を教訓に、滋賀での防災啓発活動も行っています。

TEAM DATA

チーム名：田の浦ファンクラブ学生サポートチーム
 代表者：長野景麗（人間文化学部）
 メンバー数：23名
 指導教員：鶴飼修（地域共生センター）
 活動場所：宮城県南三陸町歌津地区田の浦、学内、彦根
 関係団体：NPO 法人田の浦ファンクラブ
 近江楽座活動年度：H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26 H27

PROJECT

実施事業

(1) 海の大運動会

★見出し写真：海の大運動会 徒競走（08/07）

(2) 語り部交流会



語り部交流会（01/14）

(3) たのうらおちゃっこクリスマス会

(4) 3.11 キャンドルナイト



キャンドルナイト（03/11）

(5) 定期訪問

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は全体的に昨年より活動を活発に行えたと思う。昨年実施出来なかった「語り部交流会」を実施することができ、田の浦のことを滋賀の方に知っていただいたり防災に関する知識を広めたりすることができた。また、本プロジェクトの今後の運営に関して勉強になるお話を多く伺うことができ、メンバーにとっても成長に繋がったイベントとなった。

海の運動会をはじめとしたイベントの参加者数が大幅に伸び、田の浦の交流人口を増やすことができた。今年から東北福祉大学の船渡研究室さんもイベント運営に協力していただき、Team Bousaishi の皆さんが安全面でのサポートをしてくれた。学内、学外からスタッフとしてボランティア参加してくれる学生も多くいた。新聞などのメディアにも取りあげられ、田の浦の知名度が向上したようだ。また定期訪問により個人と個人として滋賀のメンバーと田の浦の方が徐々に仲良くなることで、より踏み込んだ話や今の状況で田の浦がより活性化していくために必要とされることなどが見えてきて、今後の活動方針の目安となった。遠く離れた土地の人と仲良くなる面白さを知ることができたというメンバーもいた。

今年度で5年を迎える本プロジェクトだが、今後の課題として一番はイベントやその他の定期的な催しもの実施を、現地にどのように移行させてゆくかである。最終的にはイベントを現地の方々为主体となって開催するようになり、私たちが手伝い・サポートという形で参加できるようにしていくことが目標である。しかし、若者が少ないことや、地域を動かす力のある世代の職業は主に漁師であり、生業の方も忙しくすでに十分協力してくださってはいるもののイベント運営は難しいなどの問題点も多く残っており、すぐに主体を移動することは難しい。また、交流人口の拡大につれて、規模の大きくなるイベントなどの運営スタッフの数も増やさなければいけない。メンバーの確保も今後の課題となっている。

活動を通して学んだこと

今年初めてこのチームに参加して学んだことは情報連携の大切さである。このチームでは大学生だけでなく、田の浦ファンクラブ事務局や地域の方々、その他に支援やボランティア、イベントに参加して下さる人がたくさんいる。その人たちと協力するために、情報共有は大切であり、欠かすことができないと思った。

杉村麗（材料科学科1回生）

人との関わり方について多く学ばせて頂いた。活動をする上でたくさんの社会人に助けてもらい関わる中で活動をするのが出来たからである。毎月のように田の浦に通うことで、個人的には自分なりの関わり方を見つけ有意義に活動することができた。一方で団体・集団として活動する難しさを知った。

野路猛（環境政策・計画学科3回生）

東日本大震災がもたらしたものは、単なる自然災害の物理的被害よりも、人間の内側に及ぶ心理的被害であることを知った。そして、そこにはインフラ整備といった目に見える復興はもとより、被災者の方々の心のケアなど、もっと複雑で内面的な問題への対策が今必要なのだと感じた。

菊池瞳（国際コミュニケーション学科3回生）

この活動を通して活動費の管理の仕方を学んだ。事前に収支計画を立てることによって、不必要な出費を防ぐことが可能となり、活動費を有効に活用する事ができた。

広瀬優樹（環境科学研究科環境動態学専攻1回生）

地域からのコメント（抜粋）

ひま輪りの会 金野安美さん

6年間お世話になった分を少しずつでも返していきたいと思っています。田の浦のお母さんたちは、いつまで滋賀から来てくれるか心配で、出来ればずっと来て欲しいです。

おちゃっこ会は田の浦以外にも色々な地域であるけど、田の浦のように家がある人と流されてしまった人々が地域として一緒に集まって定期的に出来ていることは珍しいです。すごくいいものだと思います。滋賀から来てくれて交流活動が出来ていることは町内でもかなり有名で、その中でも海の運動会は今まで参加したことはないけれど参加したい!という声をよく聞くので、来年度は町内だけでなく県内、全国から参加者を募りたいです。

指導教員より

地域共生センター 鵜飼修

現地では高台移転も終了し、復興まちづくり活動から継続的なまちづくり活動への関与が求められるフェーズへと移行している。田の浦は豊かな三陸の海に面した、80世帯300人ほどの漁村集落。日本各地の地方と同じように少子高齢化、人口減少が著しい地域である。そうした中で、県大の学生たちが現地を訪問し、田の浦の方々に出逢い、田の浦の持つポテンシャルに気づき、感嘆・賞賛することは、田の浦の方々の大きな励みとなっている。訪問する学生たちにとっても、何度も訪問することで名前を覚えてもらい、地域とのつながりが育まれる様を体感する良い機会となっている。田の浦への訪問は、地元の方々と学生の双方がメリットを受けることのできるwin-winの関係が構築されている。

3月の訪問時に大きく成長した地元の子どもに会うことができた。学生たちが活動を継続することで、そうした子どもたち：地域の未来にも大きな影響を与えることができるであろう。

DELIVERABLE

成果物／制作物



海の大運動会チラシ



語り部交流会チラシ

<その他成果物>

たのうらおちゃっこクリスマス会チラシ

3.11キャンドルナイトチラシ

14 内湖の再生と地域の水辺コーディネート



守ろう！琵琶湖の在来魚

琵琶湖の内湖、彦根市内・神上沼でブラックバスやブルーギルなど、侵略的外来種を駆除するとともに在来種のモニタリング調査を行なっています。人々がもっと水辺に親んでもらえるような啓発活動も行なっています。

TEAM DATA

チーム名：滋賀県大生き物研究会

代表者：西山浩史（環境科学部）

メンバー数：14名

指導教員：浦部美佐子（環境科学部）

活動場所：神上沼、滋賀県内

関係団体：彦根市産業部農林水産課

近江楽座活動年度：(H16)(H17)(H18)(H19)(H20)(H21)(H22)(H23)(H24)(H25)(H26)(H27)

PROJECT

実施事業

(1) 神上沼における活動



投網を投げる様子（05/21）

(2) 外来魚駆除協力隊の活動

(3) 土地改良区生き物観察会

★見出し写真：美土里ふれあい体験（06/12）

(4) 曾根沼における外来魚駆除釣り大会

(5) 展示による啓発活動 / 水族展示「県大三水水族館」



青少年のための科学の祭典（10/22）

(6) 湖風夏祭

(7) 近畿子供の水辺交流会の参加

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は先輩方が様々な事情で活動から離れられた。一方で、新しく活動に参加してくれた学生も多く、うれしく感じた。新メンバーを含めた全員が活動の目的を理解し、それぞれが活動の中できっちりと自分の役割を果たすことができた。さらに、昨年度よりも地域に触れようと行動するメンバーがより多くなったように感じられた。

今年度の神上沼での活動においては、活動場所の調査地点を増やしたり、新しい道具を今までより多く使ったりするなど、調査の効率化を図った。来年度も新たなことに挑戦する気持ちを持つとともに自分の活動を見直し改善していくことを心がけたい。また、我々は学生で駆除研究活動を行なう数少ない団体として、学生団体をリードする存在となることを目標とし活動を続ける。

今年度は駆除活動だけではなく、団体をより成長させるために啓発活動にも力を入れて取り組んだ。毎年、愛西地区で開催されるイベントで生き物観察会を行なったり、行政が開催している釣り大会に補佐として参加したりするだけでなく、主に地域の方々を対象として外来魚駆除釣り大会を自ら主催するなど、積極的に地域の方々と関わることが出来た。また、自主開催のイベントでは、より多くの方が水辺の環境に親しみや興味を持つような機会を提供することが出来たり、地域の方々との触れ合い方やイベントの開催の仕方などのノウハウを残すことができ、内容としてはとても良いイベントとなった。一方、イベントを開催するにあたりイベントの立案や人手・物品の確保、広報など至らぬ部分がまだまだ多く、メンバーのスキルアップや後輩への引き継ぎが課題となる。

最後に、設立当初から我々の活動は多くの人々、組織や企業、行政の方々の協力によって支えられてきた。そんな方々の期待に応えるためにも、より高みを目標とし、活動を継続していく。

活動を通して学んだこと

地域の人との交流の重要性に改めて気づかされた。外来魚の啓発運動を行うときに地域に人の協力があることで、我々の活動はより広く認知されていくと思う。これからも地域の人との交流を深めながら様々な活動を行なっていきたい。

奥井啓介（生物資源管理学科1回生）

活動を通して技術面と、学術面について学びました。技術的側面ではタモ網を使った魚の取り方、投網の投げ方について、学術面では魚や甲殻類の生態、雌雄の判定、同定の仕方を学びました。また、イベントに参加することで、大勢の人の前での立ち振る舞い方など、ここでしか学べない事もありました。

多久流行（機械システム工学科1回生）

今年度は、私がこの滋賀県大生き物研究会の活動に参加してから3年がたった年であった。しかし、啓発活動の仕方やイベントの準備の仕方などの活動の他にも、後輩との接し方や事業の引継ぎなど、学ぶことはまだまだ多いということを感じられた年でもあった。

西山浩史（環境生態学科3回生）

地域からのコメント（抜粋）

愛西土地改良区 魚住俊介さん

当改良区の農業体験活動は、平成14年度から始まり、平成23年度からは『水土里ふれあい体験』として、農地や農業施設を持つ多面的機能の発揮に向け、水稲・野菜等にふれあう農業体験活動を通じ、農業に対する理解を深めるとともに、次代を担う人材の育成を図る事業を目的としています。田植え・稲刈り体験の年2回には延べ150名程度参加いただいております。小学校低学年までの家族の参加が大半となっています。

滋賀県大生き物研究会さんには、平成24年度から毎年、本催しにおける「生き物観察会」の講師をお願いし、いつも快く引き受けてくださりありがとうございます。観察会では、当改良区管内にある神上沼で採取された固有魚等の水族館展示や、大型固有魚等を用いた生き物クイズにより、実際に見て触れて知ることができ、子どもはもちろん、大人も楽しめる企画となっています。また、外来魚や外来植物への危惧についても写真や絵によりわかりやすく説明され、参加者から、楽しみにされるイベントとなっています。

指導教員より

環境科学部 浦部美佐子

今年は、主体的に地域に関わることに重点を置いた年となりました。その活動を続けると共に、来年度は外来魚問題などについて、さらに積極的に勉強・研究をする年になってほしいと思います。外来種をめぐる社会の対応や、駆除の技法などは年々変わり、進歩しています。環境学を学ぶ学生団体の活動として、最先端の情報を貪欲に学ぶと共に、自分たちの活動成果が他の団体の活動の参考にされるぐらいの意気込みをもって活動に取り組んでほしいと思います。

DELIVERABLE

成果物／制作物



地域の水辺（神上沼）の広報冊子

15 かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-



地域よし、学生よし、古民家よし

築140年の古民家で、改修作業、イベント企画、ひょうたんの栽培・活用など様々な活動を行っています。地域の方とはもちろん、学部学科を超えた学生のつながり、留学生との交流といった古民家を拠点にあらゆるつながりが生まれることを目指しています。

TEAM DATA

チーム名：かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-

代表者：牧澤茜（環境科学部）

メンバー数：34名

指導教員：林宰司（環境科学部）

活動場所：彦根市上岡部町

関係団体：上岡部自治会、NPO 法人環人ネット

近江楽座活動年度：(H16)(H17)(H18)(H19)(H20)(H21)(H22)(H23)(H24)(H25)(H26)(H27)

PROJECT

実施事業

(1) イベント開催事業

★見出し写真：ピザパーティー・昔遊び（07/02）

(2) 古民家改修事業



物置の床の改修（08/25）

(3) ひょうたんづくり

(4) 地域行事への参加

(5) ひょうたんの外部イベント出店



火のある暮らし祭り（11/29）

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は、昨年度から引き続き実施しているイベントや改修作業を実施することができた。今まで行った取り組みを継続的に実施することで、地域の方に恒例の行事として認識していただけるようになった。毎年実施しているピザパーティーでは、「去年よりピザがおいしい」などの意見を頂くことができた。また、食器の片づけやピザを焼く作業など、地域の子どもたちがお手伝いしてくれた。

新たな取り組みとして、地域から「かみおかべ SB」と地域の関係性がわからないという要望を頂き、家主である大家さんや自治会、かみおかべ SB、住人として住む学生の関係性や立場を示すことができた。また、上岡部町にあるお寺からご依頼を頂き、お寺の子どもたちが行うお勤めでの遊びの企画を行った。

その他、あかりんちゅさんとの共同イベントを実施することができた。普段あまり楽座間での交流が行うことができないがイベントを通して、情報交換や楽座間での交流を行うことができた。

課題は2つある。1つ目は組織の運営形態である。組織運営の課題として、1人に負担が大きくなることがあったため、今年度からは事業ごとに班長を決め、運営を行った。これにより所属する班での活動に対して主体的に行動できた。その一方、班員以外への情報共有ができなかった場面があった。2つ目はイベントの告知が遅くなったことだ。例年では、イベントの2～3週間前にイベントを告知するチラシを回覧板に入れて頂いていたが、チラシの作成が間に合わなかったため、回覧板での告知ができなかった。来年度の活動では組織運営の方法を改め、また、早めにイベントの企画を行い、回覧板で地域の方へイベントの告知を行いたい。

古民家を拠点に活動を行うことで、地域の方との繋がりはもちろん、楽座同士の繋がり、改修でお世話になった人との繋がり、留学生との繋がりといった様々な繋がりが生まれた。今後もこれらの繋がりを大切に、活動を継続していきたい。

活動を通して学んだこと

改修作業はもちろんのこと、特に地域の子どもたちを招いて行われた節分のイベントは楽しかった。普段触れ合うことのない小さな子どもたちとどうやって接すれば楽しんでもらえるか不安だったが、元気な子どもたちを見てそんな不安は吹き飛んだ。これからも楽座の仲間と楽しい思い出をつくっていきたい。

伊賀並優也（電子システム工学科1回生）

かみおかべのイベントを通じて地域の子どもたちと遊ぶことは貴重な経験となっていると感じています。またイベントを円滑に催すには事前にしっかりと計画を立てて行動していくことが大切だということを学びました。今後もかみおかべの活動を通じて幅広い世代の方とコミュニケーションをしていきたいです。

中江祥子（地域文化学科1回生）

かみおかべの活動を通して、伝統を受け継いで行く大切さを学びました。ひょうたん作りや組子ワークショップといった、個人の活動では決してできないであろう地域の方々とのかかわりを体験することで、地域の伝統文化を知り、それを今後どのように継承、発展させて行くかを考える貴重な活動ができました。

中村美涼（地域文化学科1回生）

地域からのコメント（抜粋）

上岡部町自治会長 大西昭一さん

この一年、牧澤茜リーダーを始めメンバーの皆さん、お世話になりました。平成28年度は、活動のスタートが出遅れたかのように思いましたが、色々と思い出に残る活動をして頂いて本当に喜んでおります。夏の大改修では、物置の中から骨董品の数々、地蔵盆のお手伝い、キャンドル教室、ひょうたんの栽培など盛り沢山、上岡部町の子どもたちと交流が持てた一年であったと感じております。特に夏休み中での勉強は、自宅より、古民家の方が人気があった様です。お兄さんやお姉さんに宿題が見てもらえて楽しみにしている子どももいた様です。上岡部町文化祭にキャンドルをたくさん出品して頂いた事で「かみおかべ古民家活用計画」の人気（存在）もレベルアップした様に感じました。

指導教員より（抜粋）

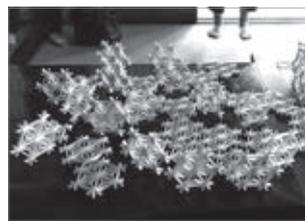
環境科学部 林宰司

今年度は、万一の事態に備えて火災保険などの再検討を行ったことが、学生である皆さんが地域で活動する際の責任について考えるととても良い機会になったかと思えます。よそ者である皆さんが地域に出入りする際には不審者に見られかねない場合もありますが、古民家に入出入りするメンバーの顔写真一覧を作成して自治会にお渡ししておくことはとてもよいアイデアだと思えました。活動を継続するためには、地域が必要としていることをよく考え、新しい事業や既存の事業内容の見直しを行って下さい。昨年度実施した上岡部町の歴史調査事業のように自分たちから地域に出て行く形態の事業が展開されることを期待します。

瓢箪の栽培については3年が経過し、事業の1つの核になってきたように思います。栽培した瓢箪を実用的な製品にするために本年度は苦しんだようですね。多くの学部の学生メンバーでさらに知恵を絞って、魅力ある製品を開発してみてください。

DELIVERABLE

成果物／制作物



組子コースター



栽培したひょうたん



ひょうたんキャンドルホルダー

<その他成果物>

物置の床

ひょうたんプランター

16 Taga-Town-Project



多賀の魅力再発見！

多賀町を拠点に町の魅力を再発見し、町内外に発信する活動をしています。また「一箱古本市」を継続的に開催するとともに、これまで主に活動してきたまち中から「集落」に目を向け、その現状と課題解決に取り組む人々の活動を伝えています。

TEAM DATA

チーム名：Taga-Town-Project

代表者：阪本ひかる（環境科学部）

メンバー数：3名

指導教員：迫田正美（環境科学部）

活動場所：犬上郡多賀町

関係団体：多賀木匠塾、多賀町商工会、有限会社 A.SITE

近江楽座活動年度：H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26 H27

PROJECT

実施事業

(1) 「お多賀さん de 朝市」の調査

(2) 一箱古本市



古本市 (02/25)

(3) 地域交流 in 水谷訪問

(4) 地域交流 in 八重練

(5) 「ふるさと楽市」参加

★見出し写真：ふるさと楽市 (10/16)

(6) 「石栗庵」さんお手伝い

(7) 桜坂イルミネーション



桜坂イルミネーション (12/03)

(8) 「多賀結い会」参加

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

実際に1年を終えてみると、自分たちで企画して何かを行う、というよりも、多賀町で活動する他の人たちのお手伝いや、他の人の企画または既存の地域のイベントへの参加がメインとなっていた。

しかし、反省点ばかりではなく、自らが地域イベント等に参加することを通して地域の人たちに寄って行くことで、「地域に入り込む」ということが少しでもできたと考える。特に、これまで行く機会が少なかった絵馬通り以外の集落のほうも回ることで、地域の知識を増やすという点で良かった。他の楽座チームと同様に、TTPのメンバー数が少ないことが問題として挙がっていたが、顔を町の人に覚えてもらえやすい、という点ではよかったように思う。加えて、臨機応変に動きやすいという利点もあった。

課題としては、新入生をどう勧誘していくかが問題である。また、どうやって周りに助けを求めると、ということを考えていきたい。幸いにして、多賀町では「多賀結い会」というつながりを得られる集まりが今年度から始まり、近江楽座のほうでも「ぞろぞろ会」という企画を学生委員会が実施している。それらを上手く活用していきたい。

実施する事業の内容も、自分たちの力量を考慮して、計画を立てていかねばならないと考えている。現在自分たちで企画し、行おうとしているのは以前からずっと実施している「古本市」である。これは本を売るというよりも、地域の人とコミュニケーションを図ろうとすることが目的であり、多賀大社で月に一回開かれている朝市にも出店できないかと考えている。また、他の楽座チームと協力して、出張版「古本市」を開催できればと考えている。

あとは、「地域の魅力を外に発信する」というTTPの活動目的に即して、今年度はSNSをなるべく活用しようとしたため、以前よりも更新頻度は上がったのではないと思われる。

活動を通して学んだこと

これまで、「自分たちで何か企画して実施しないと」といった焦りがあったが、今年度はお手伝いやイベントへの参加を通して、多くの人と知り合うことができた。何かを生み出そうとすることばかりに拘るのではなく、地域に入り込もうとすることも大事であると学んだ。

阪本ひかる（環境政策・計画学科3回生）

今後のイベントの活性化に利用してもらいたいという思いから、「お多賀 de 朝市」の調査を行った。TTPもイベント主催者として経験を積み重ねてきたが、この調査で学ぶことは多かった。年々増え続けるイベント開催の中で、どのような人に来てもらうか、広報は十分かなど今後の活動の参考にしてもらいたい。

壽莉紗（環境建築デザイン学科4回生）

今年度は活動拠点を「絵馬通り」から「八重練」へ移動したことで不安ばかりだったが、多賀町の方の協力とTTP内での度重なる話し合いをし、実現されたのであり、ここに至ったのもTTPが多賀町でできることと私たちがいかに楽しめるかを考えての事だった。この決意を忘れず、来年度も新たな目標を定めていきたい。

石見春香（環境科学研究科環境計画学専攻1回生）

地域からのコメント（抜粋）

八重練シェアハウス事務局 中西茂行さん

多賀町八重練区に私が住んだ時は、40世帯になったと地区の方々に喜んでいただきましたが、20年の歳月が過ぎて現在は31世帯になってしまいました。地区内にどんどん空き家が増えていく中で、空き家活用の方法として学生に住んでもらうためのシェアハウスを平成26年に作りました。

TTPの活動については、発足当時より学生の活動の一助になればと微力ながらお手伝いなどもしてきましたが、今回活動の拠点としてこのシェアハウスに入ってもらうことになり喜んでます。昨年の12月から一ヶ月間、八重練地区+TTPで地区内の尾谷川沿いの桜並木の80mの区間でクリスマスイルミネーションを実施しましたが、地区の方々にはたいへん喜んでいただけましたし、地区の中に若い学生たちがいてそのような活動をしてくれることで地区に元気が出ることを実感していただけました。

シェアハウスを拠点として、学生がいろんな活動をしていくことで『学生力』を発揮して、地区の住民との交流を深めてくれれば幸いかと考えています。

指導教員より

環境科学部 迫田正美

TTPの活動のあり方についていろいろ試行錯誤する1年間であったように思う。少ない人数の中でも多くのイベントに参加し、また八重練を中心にいくつかの集落でのイベントに参加できたことも今後の活動の方向性を考える上で良い経験になったと思う。地域の人達とともに地域を考え、活動していく意義について、また自分たちのやりがいということについても両立しながら仲間を募っていくことの大切さにも気づかされた1年であった。

DELIVERABLE

成果物／制作物



桜坂イルミネーションチラシ



一箱古本市チラシ（八重練地区にて開催）

<その他成果物>

新入生勧誘チラシ

本棚

イルミネーション用かまくら
一箱古本市チラシ（湖風祭）

17 たけとも－竹の会所・友の会－



地域と共に笑顔の集まる場をつくる

宮城県気仙沼市に復興の拠点となる場所を作りたい。滋賀県立大学陶器研究室が中心となって始動したのが「竹の会所」プロジェクトです。そして竹の会所の今後を支えていく友の会、それがたけともです。祭りや補修 WS を通して地域と交流しています。

TEAM DATA

チーム名：たけとも－竹の会所・友の会－

代表者：成瀬洋子（環境科学研究科）

メンバー数：22名

指導教員：陶器浩一、永井拓生（環境科学部）

活動場所：宮城県気仙沼市

関係団体：株式会社高橋工業

近江楽座活動年度：(H16)(H17)(H18)(H19)(H20)(H21)(H22)(H23)(H24)(H25)(H26)(H27)

PROJECT

実施事業

(1) たけとも春ワークショップ

(2) たけとも夏ワークショップ



気仙沼災害 FM 局の新スタジオ改修 (09/14)

★見出し写真：浜の会所の屋根補修 (09/16)



たけとも夏祭り潮風茶会 (09/22)

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

夏のワークショップは大きく二つの作業に別れた、FM 局の改修と浜の会所・竹の会所の改修である、それに加えて祭りの茶会の準備で、格子の組み立てがあった。この量をこの期間で仕上げたことは、大きな成果のひとつではあるが、明らかなオーバーワークであった。これは今回の一番の反省点でもある。FM 局を仕上げる事に一杯いっぱいになってしまい、お祭りの日も準備万端とは言えない状態になってしまった。作業ばかりになってしまうと、他の事にも目がいかなくなってしまう。本来もっと地域に目を向けていかねければいけないのに、その余裕もなかった。これは、作業効率の問題ではなく事前準備のときから、考えられる事であり、やりきれない量をやろうとした事が原因であったと言えるであろう。

また今年の夏のワークショップは、大きな転機を迎えたと感じた。今回から建設当時のメンバーがいらないというのも転機のひとつだといえる。しかし、見えない転機というものがあったようにも思う。建設当時のメンバーの気持ちを大切にと思ってきていたが、やはり当事者ではない今の私たちにも無理であり、そのまま気持ちを大切にすることもおかしいことなのである。自分たちの今感じていることと、活動の理念をしっかりとって活動していきたいと感じた。これは、気仙沼での作業だけではなく、事前準備からだと思う。事前にお祭りの準備をしながら、先輩の話の聞いている、こういったことが向こうでの生活や活動の理念の理解には一番だと今回改めて感じた。ワークショップは、向こうで行うものだけではないということが大切なのではないかと思う。

たけともは、今後どうしていくか、という問題に今ぶつかっている。来年度に浜の会所の解体を控え、2年後には竹の会所である。一言に壊すというと簡単に聞こえるかもしれない、しかし終わり方をデザインすることが必要なのではないかと思う。そういったことを今後考え、話しあっていかなければならない。それとともに受け継いでいくことかかないことを整理していく必要がある。

活動を通して学んだこと (抜粋)

活動を通して学べたことは人と関わることだ。先輩方、地元の方、地元の子どもたち、どの人もたけともに参加していないと出会えなかった人だ。また、大学の普通の授業では学べないような、人への感謝や人と話す楽しさなども知ることができた。たけとも活動によって大きく成長できたと感じる。

岩本万慈 (環境建築デザイン学科 1 回生)

今回 3 年目の参加で、生活することの大変さを改めて学んだ。活動を行いながら自分達で生活していくことは当たり前のことであるが、学生の我々では難しい。そんな中、様々な面で応援してくださる地域の皆様がいた。そんな地域で活動させてもらえることは有難い事だと改めて感じた。

本田山 成昭 (環境建築デザイン学科 3 回生)

たけともを通じて子供の成長・変化が見れたことがとても大きかった。中学生になっていく子供たちが自分たちとの交流から何を感じ、これからの東北を考えるのか、いずれ聞いてみたい。中学生、高校生と大人に近づいていく子供たちと共に東北の未来を考えて行けるようにこれからも関わっていきたくと思った。

山原康弘 (環境建築デザイン学科 3 回生)

地域からのコメント

(株) 高橋工業 代表取締役 高橋和志さん

今年度のたけとも活動について、地域として感謝しています。あの震災から6年が経過し、徐々にインフラ整備が進展して形としての復興は進んではいますが、震災で受けた地域住民の心の傷は、深層に隠れて癒されていない状況です。そんな中、学生が地域に入り、今後も活動を継続するためには、地域の暮らしを理解し、住民にそっと寄り添う思いやりの心が一番大切だと思います。たけとも活動は、当初の活動理念を想い出して、義務ではなく、自発的な活動こそが原点です。学生たちもそのことを思い出し、自分たちに何ができるかを考え、活動してほしいと思います。

今年度は、仕事量が多く上手く回っていないこともありましたが、無理せずできることを自然体で継続して活動することが、学びの基本です。今後のたけとも活動を地域としても、そっと見守って協力して行きたいと思います。

指導教員より (抜粋) 環境科学部 陶器浩一

竹の会所は4年間の仮設建築許可が満了したが、「地域にとって欠かせない施設なので何とか存続させて欲しい」と要請を受け、2015年に再度許可を得た。本年度は、気仙沼高校茶道部の協力を得て、地域の方々のために茶会(潮風茶会)を開催した。インフラの復旧・復興は徐々に進んではいるが、一方でひと(コミュニティ)の復興が課題である。その中で一番大切なことは、地域の方々が地域を愛し誇りに思うことである。これからは、竹の会所が地元愛の生まれるような場所であるように、地域に根付く活動を続けていきたい。

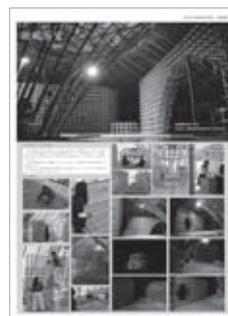
活動を通じて常に感じているのは「そっと寄り添う」ことの難しさである。人それぞれペースが違う。そういう方々どう向き合い、どう寄り添えばいいか。正解はないが、常に考えなければいけない問題である。この場所が、笑顔の集まる、未来に続く場所として、みなが心の底から笑えるような地域づくりのお手伝いをしてゆきたいと考えている。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



たけとも夏祭りチラシ



潮風茶室

<その他成果物>

たけとも夏祭りポスター

たけとも祭り 2016 初夏

気仙沼災害 FM 改修

18 おとくらプロジェクト



高宮に新しい風を吹かせよう！

旧中山道高宮宿をより元気にすることを目的に活動しています。築200年の古民家を学生が改修してできたコミュニティスペース「ギャラリー喫茶おとくら」の運営を軸とし、地域活動への参加、イベントなど幅広い活動を行っています。

TEAM DATA

チーム名：おとくらプロジェクト

代表者：村尾采佳（人間文化学部）

メンバー数：20名

指導教員：迫田正美（環境科学部）

活動場所：宿駅 座・楽庵、高宮町

関係団体：高宮経友会

近江楽座活動年度：(H16)(H17)(H18)(H19)(H20)(H21)(H22)(H23)(H24)(H25)(H26)(H27)

PROJECT

実施事業

- (1) イベント活動
- (2) ギャラリー活動
- (3) 喫茶活動



メニュー講習会 (07/17)

- (4) 座・ギャラリー活動
- (5) 広報活動
- (6) 寺子屋



寺子屋 (08/27)

- (7) 「ミツマルシェ」出店
★見出し写真：ミツマルシェでの営業 (10/23)
- (8) 研修旅行

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は喫茶活動を軸に、イベント面と人とのつながりの面で大きく飛躍したと感じる。「ぞろぞろ会」をはじめ、異なる団体の学生同士が交流できるイベントに参加する機会が増えただけでなく、同世代のいろいろな学生と交流したいという意識も向上した。それぞれの団体の活動内容を話し合うことで、それぞれの団体がどんな思いでどんな活動をしているのかを知り、多くの刺激を受けた。

学生同士がつながるきっかけとして最も役に立ったのは「ギャラリー輪々」の存在である。輪々は学生無料で貸し出していることでメンバーが気軽に学生を呼び込めるようになっていく。輪々で学生が展示を行ったものとしては、生活デザイン学科の学生が運営する+sopo や今年度新しくできた座・沖島などがある。+sopo には手作りのアクセサリなどの販売を行ってもらったのだが、おとくらを訪れたお客さんや地域の方々に好評であった。さらに普段あまり話す機会のない生活デザイン学科の学生と交流できたこともこの展示をしてよかったことである。座・沖島には沖島の写真を展示してもらった。展示してもらった学生とのつながりを今後も大事にしていきたい。しかし学生団体は人が変わっていくものだ。人が変わっていく中で今まで築いた人と人とのつながりもしっかり引き継ぐことが今後の課題として挙げられる。

2014年度の活動実績報告書で課題として挙げていた学生とつながりを持つことについては改善しつつあると思う。しかしまだ大学内でのおとくらの知名度は低いように感じる。今後の課題としては様々な学科の学生が所属していることを生かし、おとくらの知名度を上げることを挙げる。

お世話になった高宮町の地域の方々におとくらプロジェクトの活動を通じて恩返しができるよう到来年度も積極的に活動に参加していきたい。今後はおとくらプロジェクト主催のイベントを高宮町で行うことで高宮町に「新しい風」を吹かせ続けることを目指したい。

活動を通して学んだこと

おとくらの活動では様々なイベントを様々な人と作り上げていくことの楽しさを学びました。高宮サマーフェスティバルでは、地域の子もたちが自分たちのゲームを楽しそうに遊んでいて、やりがいを感じました。

石田真那華（生活栄養学科1回生）

おとくらが中心となり、学生と地域の人や他県から来られた人たちが出会い、ゆったりと会話を楽しむことで、実際に行ってみないと分からないその地域の見えない魅力が他県の人に伝わるということを学びました。

山口文菜（人間関係学科1回生）

おとくらの活動を通して人と出会うこと、コミュニケーションをとることの楽しさを学んだ。様々な経験をされた人の話を聞くことでいい刺激をたくさん受け、いろいろと思考することはいい経験となった。この経験は大人になっても忘れることのない、きっと人生の役に立つ経験だと思う。

岡田優太（環境建築デザイン学科2回生）

活動をすることにより、地域の人と交流ができ、これからの自分の人生に役に立つと思ってました。しかし、一年の活動を通して学んだことは、どのように地域を活性化していくべきかということです。地域の人と交流するだけでなく、地域活性化に繋がる交流が重要であり、自分たちで考えて動くことが大切だと感じました。

柳瀬直城（環境建築デザイン学科2回生）

地域からのコメント

おとくら家主 加藤義朗さん

9月には、上田洋平先生のご厚意で、法政大学の小峰先生とゼミ生のみなさん、池永副知事さんを招いての『近江楽座の取り組みについて』の会場が、「おとくら」で、行なわれました。リーダーのやんちゃんの発表にも感動しました。

自称 おとくら応援隊 隊長として、「継続は、力なり」を実感した一年でした。たくさんの皆さんのお陰で益々「おとくら」が成長しますように！

指導教員より

環境科学部 迫田正美

年々イベントや展示会が充実してきていることはありがたく、うれしいことである一方で、新設された座・ギャラリーの運営なども含め、関連する活動が広がる中で、メンバーひとりひとりが活動の在り方について工夫しながら今後の体制づくりに向けて動き出せたことは大きな成果だと思います。

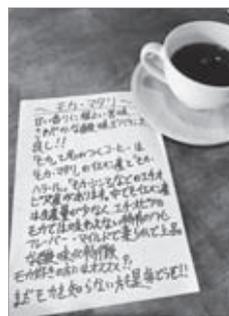
班ごとの役割分担も整理できつつありますから、それぞれ工夫をしながら常にみんなで作くりあげるおとくらであり続けてほしいと思います。

DELIVERABLE

成果物／制作物



おとくらつうしん4月号



数量限定コーヒー

<その他成果物>

おとくらつうしん
座・ギャラリー チラシ
ギャラリー輪々 チラシ
イベント チラシ
おとくら紹介チラシ
湖風祭宣伝チラシ

19 木興プロジェクト



木匠塾×被災地支援

東日本大震災を受けて、滋賀県立大学の建築デザイン、生活デザインの学生による震災復興プロジェクト。建築・デザインを学ぶ私たちに何ができるのか、何かしなければという思いをきっかけに、ものづくりによる復興支援を目的としています。

TEAM DATA

チーム名：木興プロジェクト
代表者：中村睦美（環境科学研究科）
メンバー数：20名
指導教員：ヒメネス・J・R（環境科学部）
活動場所：宮城県南三陸町歌津地区田の浦
関係団体：NPO 法人田の浦ファンクラブ
近江楽座活動年度：(H16)(H17)(H18)(H19)(H20)(H21)(H22)(H23)(H24)(H25)(H26)(H27)

PROJECT

実施事業

(1) 田の浦訪問、視察



キッチン案説明（7月）

(2) サマースクール

★見出し写真：サマースクール 建て方（09/12）

(3) 防災かまどベンチの普及活動

(4) プレ木・道具講習

(5) スプリングスクール

(6) 3.11 キャンドルナイト参加

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

志津川や陸前高田においては非常に土木的な建築が作られている。居住者は埋まらないといわれている公営集合住宅の建設や壮大な防波堤の建設。立て急ぐ復興のあり方には疑問を感じる。

田の浦では嵩上げ工事が完了し、高台には新たな街区が形成された。そしてその街区に新たに「田の浦地区集会所」が落成した。我々の作った田の浦センターよりも広く、きれいな建物である。しかし住民の方々の話を聞いていると、この集会所は鍵の管理も厳しく、靴を脱いで入らなくてはいけない、などの理由で、あまり使われることがないということである。その話を聞いたとき、あの交流センターは何か強い可能性があるのではないかと感じた。2012年建設当時は集会所ができるまでの仮設的な交流センターという位置づけであったが、この交流センターが田の浦の拠点になるということが可能かもしれない。

そのような中で田の浦交流センターキッチン増設を行った。毎日作業している中で見に来てくださる人も多い。そして主体的にイベントが行われたりと、私たちの活動によって復興のあり方に少しでも変化があったのではないだろうか。

2011年から6年かかわり続けた被災地。通っているうちに被災地という感覚ではなくなっている。単発的なボランティアというかかわり方は震災後数多く存在したであろう。仮設的な建築やゲリラ的に建てるということもひとつ効用性があるだろうが、木興プロジェクトは6年継続して田の浦という地域にかかわり続けている。その中で田の浦に大工として就職したメンバーもいた。建て急ぐ復興ではなく、じっくり地域に根ざした復興の姿があり、6年たった東北の現在を伝えることもできる。

今後はより多くの人にこの活動を知ってもらうことや、木興プロジェクトが震災以降行った活動内容、ノウハウなどを伝えていくため一連の活動をまとめる作業が必要になってくる。

活動を通して学んだこと (抜粋)

今後、今までの経験を活かして、考えて、次のステップに行けることが、一番望ましいのではないと思う。決してこれまでの活動を否定することなく活かし、自分たちのもつ知恵や技術を活かし、新たな道が開けることを強く願う。

咲花李歩 (環境建築デザイン学科 3年)

被災地が日々変化していく中で私たちは田の浦の人たちにどのような影響を与えられているのか、それを意識して今年の活動に取り組んだ。建物がどのように作られるかということが、ざっくりですが、わかるような内容だったため、1年生が多かった今年は段階を踏んで作業ができてよかった。

嶋岡慧太 (環境建築デザイン学科 3年)

行くたびに変わる田の浦の状況に合わせて、関わり方も柔軟に変えていくべきなのではないだろうか。今後、学生が田の浦に行くことや関わることはどのような意味を持つてくるのか。来年度、4年生になり木興とも田の浦とも少し距離をとることになると思うが、何度かは田の浦の人たちに会いに行けたらと思う。

西川夏生 (環境建築デザイン学科 3年)

センターは土間という要素が功を奏して使いやすいという言葉もいただいた。さらに使いやすいべきではあるし、自分たちの手で建てたいという思いも強かった。サマースクールでもものをつくり上げるといことは、まちづくりとはまた違うもので、形として残っていき、人々の生活が営まれる。人々との関わり以外にも建築としての可能性も実感した。

中村睦美 (環境科学研究科環境計画学専攻 1回生)

地域からのコメント

田の浦住民、お茶っこ会参加者 三浦サエコさん

高台に新たな集会所ができたが、高台に行くには坂をあがらなくてはいけないし、高台以外の人が使にくい。田の浦センターは土足のまま入れてとても使いやすい。

ユタカ製作所社長 菅野豊さん

海岸の土木作業をまだだれも手をつけていない。もし何か作りたくて悩んでいるなら、来年木興が来てくれるなら、出資するからこの作業をやらないうか。

田の浦契約会前会長 佐藤久次さん

サマースクールで長期間来ることがなくなっても、イベントなどにはぜひ来てほしい。いつでも待っています

指導教員より

環境科学部 J.R. ヒメネス・ベルデホ

東日本大震災が起き、滋賀県立大学の加子母木匠塾が母体となって「木興プロジェクト」を立ち上げ、2011年8月ご縁があつて繋がった宮城県南三陸町歌津田の浦に番屋を建設させていただいた。それから現在まで田の浦に通い続けて5年半になる。その間、学生たちは田の浦に通い、現地の方々と交流し、番屋や交流センターを完成させた。現地の方々の意見を聞き、試行錯誤の連続であったであろう。学生たちにとっては大変貴重な経験をさせて頂いた。

震災復興はまだまだ道半ばであるが、学生たちが建築を通してお手伝いさせていただくことはひと区切りとなるであろう。ただ、終わりではない。大切なのは、思い続けること、そして、また機会があれば、いつでもお手伝いできるモチベーションを持つことである。

「木興プロジェクト」は新たな課題を見つけ、進んでいかなければならない。これからの活動に期待したい。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



田の浦センター
(キッチンを増設)

20 フLOWERエネルギー「なの・わり」



植物でエコな活動しませんか？

植物を用いた資源循環型社会の形成を目標として、休耕田や学内の空き地を利用して菜の花およびひまわりを栽培し、そこから油を搾りだして燃料を生産します。また、小学校を対象としたエネルギーに関する授業も行っています。

TEAM DATA

チーム名：フラワーエネルギー「なの・わり」

代表者：土田泰輔（工学研究科）

メンバー数：19名

指導教員：山根浩二、河崎澄（工学部）

活動場所：彦根市内

関係団体：菜の花プロジェクトネットワーク

近江楽座活動年度：H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26 H27

PROJECT

実施事業

(1) 菜の花・ひまわり栽培

★見出し写真：菜の花畑 草刈り（04/15）

(2) 小学校出前授業



出前授業（10/04）

(3) 高大連携授業



高大連携授業（08/23）

(4) イベント参加

(5) ワークショップ

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年は菜の花の品種を変更したおかげで、連作障害が生じず、うまく育ち、昨年度より100mL多く油をとることができました。また、畑に行く回数を増やし、定期的に草刈りをしたことで、雑草を減らすことができたのも効果があったかなと思います。ひまわりに関しては、雨が多かったことと、畑の水はけが悪いことが原因で、種を植える時期が大幅に遅れてしまい、収穫量が10分の1になってしまいました。来年度は、梅雨が来るまでに種まきを終わらせようと思っています。

小学校の出前授業では、子どもたちに授業や実験を楽しんでもらえ、地球温暖化やエネルギーについて興味をもってくれたかなと思います。また、環境についてのクイズもみんな真剣に考えてくれて、ほとんどの問題に正解してくれたので、理解を深めてくれたのではないかなと思いました。

今年は、初めての取り組みであるヤンマーミュージアムでのワークショップがありました。ヤンマーミュージアムの方と何度も打ち合わせをして、子どもたちが楽しめるような実験や工作ができたかなと思います。また、県外から来られた方もいたので、なのわりの活動も広い範囲で知ってもらえたかなと思います。今後はバイオディーゼルカートを使ったイベントをぜひやってほしいとのことだったので、そのイベントについても考えていきたいと思っています。

今年は、ヒートパイプなどを取り入れて、子どもたちに体験してもらう実験を増やすことができました。ワークショップでは子どもたちみんなが楽しんで実験してくれたので、新たな実験を増やせてよかったと思います。ただ、初めての取り組みということで、時間をたくさん費やしたため、小学校の出前授業が1校しか行けませんでした。来年度は、スケジュール管理をしっかりと、早め早めの行動をしていきたいと思っています。

活動を通して学んだこと

活動を通して学んだのは農作業の大変さです。種まきから収穫までの間にも、雑草を刈り取ったり、間引きをしたりと毎週のように作業を行っていました。普段、私たちが何気なく利用する食べ物などはこういった作業を一生懸命してくれている人のもとで成り立っているんだと強く感じました。

井上翔太（機械システム工学科4回生）

今年はヤンマーミュージアムでワークショップを2回行い、子どもたちにスーパーボール作りといった体験学習で理科の楽しさを伝えることができました。また、菜種油の製造では菜種作りから油の搾油までの工程を学び、同時に油づくりの難しさを感じた。今後も引き続き活動を行っていききたい。

梅野遼平（機械システム工学科4回生）

畑活動では、植物を育てる大変さ、油の生成を行うまでの管理の大変さを学んだ。小学校の出前授業、ヤンマーミュージアムのワークショップでは、子どもに的確に分かりやすく物事を伝える方法や、一から運営する事の難しさを学んだ。なの・わり活動を通して、普段経験することができないことを経験できた。

清水康平（機械システム工学科4回生）

今年収穫したひまわりの油の量はそんなに多くないという結果になってしまいました。原因としては、雨が多く降ったことだと思います。来年度は、土壌改善をして水はけをよくしていけたらと思います。また、イベント事はどれももうまくいったので良かったです。

田中昌希（機械システム工学科4回生）

地域からのコメント

お借りしている畑の所有者 吉島利博さん

一年間お疲れ様でした。本年度は、菜の花油は、昨年度よりも多くとることができてよかったと思いますが、ひまわりに関しては、天候に恵まれずに豊作とはいえない結果になったのは残念に思います。農作物は時期に敏感であり、今回は種を撒く時期が遅れてしまったので、それが原因だと思います。学業の両立等で難しいとは思いますが、来年度は時期を守ることを心がけて頑張ってくださいと思います。

指導教員より

工学部 山根浩二

本年度は、小学校への出前授業に加えて、新たな取り組みとして、地元企業でもあるヤンマー株式会社の「ヤンマーミュージアム」におけるワークショップを実施し、子どもたちへのエネルギーや環境への意識づけの一助となったことは、大きな成果であると思います。

また、チームの正式な事業ではなかったが、チームが所有するディーゼルエンジン“バイオディーゼルカート”をNHK総合テレビ“ガッテン”が取材し、ピーナッツ油で運転する場面などが全国放映されたことは、本学のPRに貢献し、大学の名を全国区に知らしめた功績は大きいと思います。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



なのわりだより 6月号



なのわりだより 10月号

21 男鬼楽座



茅葺き屋根に登ろう！

彦根市男鬼町を中心に、山間集落を通して文化的景観資源の保存と活用を考えます。毎年7月には茅葺き屋根の葺き替えイベントを開き、楽座メンバーや職人の方に加え、多くの他大学生・一般の方を招いています。

TEAM DATA

チーム名：男鬼楽座
代表者：岩田志歩（人間文化学部）
メンバー数：13名
指導教員：濱崎一志、石川慎治（人間文化学部）
活動場所：彦根市鳥居本町男鬼
関係団体：湖北古民家再生ネットワーク、NPO法人彦根景観フォーラム
近江楽座活動年度：H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26 H27

PROJECT

実施事業

(1) 男鬼集落での茅葺き屋根葺き替え事業

★見出し写真：男鬼葺き替えイベント（07/17）



男鬼葺き替えイベント（07/17）

(2) 城楽邸での茅葺き屋根葺き替え事業

(3) 茅刈りイベント



茅かり（11/26）

(4) 八幡掘り祭り

(5) 栗栖での茅葺き屋根葺き替え事業

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

私たち男鬼楽座は、男鬼の歴史的建造物の保存・茅葺きの技術の伝承・結システムの伝承という3つの目的を持ち1年間活動してきた。

今年度は男鬼では天候にも恵まれ予定していた葺き替え作業を終えることができた。また、3日間という少ない日程の中で、チームワークを発揮できたことはよかった。一人では出来ない作業を仲間とともに協力して行い、参加者全員がやりがいをもって活動に取り組むことが出来た。

これまでのイベントで、私たちは男鬼に残る茅葺き民家を使わせてもらって葺き替えイベントを実施してきた。しかし、男鬼集落内でも民家の解体が進み、文化的価値を持つ景観が失われつつある。この状況に私たち学生がどのように関わっていくことが出来るかをもう一度考えなおす必要があると感じた。

どのイベントでも職人をお招きし、その都度、茅葺き技術を教えてもらい、実際に体感して学ぶことが出来た。しかし、簡単には職人のように作業が出来るわけではない。そのため事前に葺き替えに必要な縄結びの講習をしたり、活動の中で経験を積み、また仲間とも教え合いながら活動して、少しずつ技術を習得できたと思う。そして職人から教わったことを、自分だけでとどめておくのではなく、他のイベント参加者の方に教えることができた。また逆に他の参加者から自分たちの知らないことを教えてもらうこともあり相互に技術の伝承が出来るように動けたのではないかと感じる。

また、実際に葺き替えに参加して体験する方法も重要であるが、それができないお年寄りや子どもにとっては他にイベントを行い貴重な茅葺き民家を公開し見ってもらうことで伝統を伝えていくこともできたのではないと思う。今後は茅葺き民家の様々な面での活用を考えていきたいと思う。

活動を通して学んだこと

楽座の活動を通して、地域の方々はもちろん同じ活動をする仲間とのつながりや、力を合わせて取り組むということの大切さを学びました。また、実際に体験することで伝統的な文化への理解が深まり、今回の活動をきっかけに伝統文化を伝えるということを考えていきたいと感じました。

小海倫平（地域文化学科3回生）

男鬼楽座を通して茅葺き民家の価値について深く考えることが出来ました。茅葺き民家など、普段身近に感じないものなので、なかなかその価値や保存について真剣に考える機会がありませんでした。しかし実際に自分が保存に携わることによって、かけがえのない貴重な文化遺産であると実感させられました。

児玉隆希（地域文化学科3回生）

楽座の活動で普段できないような体験をすることが出来ました。葺き替え作業は大変手間のかかるものであることを体感することで、昔ひとつの家庭だけで茅葺き民家を維持していくことは不可能であり、集落の結束の強さが重要であったことが分かりました。日本の伝統文化を学ぶ良い機会になったと感じました。

谷口圭汰（地域文化学科3回生）

今回活動を通して学んだことは、周りの人たちの協力がなければ私たちの活動は行っていけないということです。職人さんやOB、OGさんなど様々な人の協力の下で行う活動であったからです。今回行ってきた活動を今後活かしていきたいと思いました。

村井ほのか（地域文化学科3回生）

地域からのコメント（抜粋）

多賀クラブ代表 中川信子さん

10月29日と30日、多賀町栗栖にある西村商店の茅葺き屋根の修理に滋賀県立大学の学生さんが参加してくれました。男鬼での経験をいかし、みなさんテキパキ動いて息の合った作業がすみました。軽やかに屋根に登っての作業、屋根裏での作業など自主的に行動を起こす様子はとても頼もしく、経験することの大切さがよくわかりました。

かつて茅葺き屋根は地域の人の手によって守られてきましたが、材料の調達や作業の大変さなどにより、その維持が困難となり消えていくことが多くなっています。そのような茅葺き屋根を大学生の力を活かして守っていくことができれば、貴重な地域資源を次の世代に残していけます。

また、昔の暮らしを知ることは未来を担う学生さんにとって大きな力になることでしょう。茅葺き屋根は人々のつながりによって守られるので、ぜひ息の長い活動を続けてほしいと思います。

指導教員より（抜粋） 人間文化学部 濱崎一志

今年度の活動は新たに多賀町栗栖の西村邸の吹き替えをおこなったことにより、活動の幅が大きく広がった。

男鬼・大久保邸や上丹生・城楽邸の葺き替えや茅刈りイベントも、湖北古民家再生ネットワークなどと協働で、計画的に進めることができました。

また、古民家の活用の視点から男鬼楽座のメンバーで進めている町家の公開イベントも着実に実施できた。このイベントは八幡堀祭りにあわせて町家の公開をおこなったもので、近江八幡デザイン・カレッジで知り合った八幡商業高校の生徒4名も参加してくれました。地域貢献活動における高大連携の可能性を広げることができました。

空き家の増加、地域の活力の衰退など様々な問題が増えつつあるなかで、今年度のような民家を活かした地域の活性化を計る事業が、持続可能な形でさらに幅広く展開されることを期待します。

DELIVERABLE

成果物／制作物



男鬼葺き替えイベントチラシ



茅刈りイベントチラシ

22 タクロバン復興支援プロジェクト



共につくる集まる場！

台風により大きな被害を受けたフィリピンのレイテ島タクロバンで復興支援を目的に活動しています。コミュニティの再建をめざして、場を作るだけでなく作る過程や調査などを地域の方と行き交いを深めることを重視しています。

TEAM DATA

チーム名：タクロバン復興支援プロジェクト
代表者：浅井翔平（環境科学研究科）
メンバー数：9名
指導教員：芦澤竜一、ヒメネス・J・R（環境科学部）
活動場所：フィリピンレイテ州タクロバン
関係団体：タクロバン市役所

近江楽座活動年度：(H16)(H17)(H18)(H19)(H20)(H21)(H22)(H23)(H24)(H25)(H26)(H27)

PROJECT

実施事業

(1) ワークショップ

★見出し写真：ワークショップ説明 (08/06)



ワークショップ発表 (08/07)

(2) 現地調査



現地調査 (09/03)

(3) 現地調査・モックアップ

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度はリサーチと地域の方との関係作り目標とした。その目標通りに十分なリサーチと交流ができたと思っている。中でも今までフィリピンだけの活動であったが、日本での活動も行うことができ、その点に関しても満足している。しかし、もう少し成果物として発信できるものを製作すべきだったと感じている。来年度は予算などと相談しながら書籍化などの活動もできればと感じている。特に来年度の活動は製作物を作るという重要な年となるので、今までの交流を生かし現地でがんばりたいと思っている。そのためにももう少し訪れる頻度を増やすことが大切だと思っている。

また、昨年度製作した使い古されたプレイルームは現地の大人の建設から離れていたところにあったため、メンテナンスなどがおろそかにされ大部分が壊れていた。もっと現地に入り込み住人の手に受け渡すことが重要だと考えさせられた。

今回の活動でも感じたが、結局は自分たちだけでは活動できないので現地の方の知識や技術をいただきながら活動し、それらをまた次の代の学生につなげたいと思っている。

活動を通して学んだこと

今年、初めてタクロバンにいきました。日本とはまったく違う環境で驚くことがたくさんありました。現地の人はとても優しくフレンドリーに対応してくれました。英語がそんなにできなくても、それなりに何とかなることもわかりました。

澤村優佳（環境建築デザイン学科4回生）

近江楽座となり2年であり、どのように継続していくかという難しさがある。他にも被災地をフィールドにして活動しているチームなどと同様にいつまで続けるべきかという議論もある。タクロバン復興支援プロジェクトにはまだまだやれることがあると思うので広い視野を持ち今後も活動していきたい。

浅井翔平（環境科学研究科環境計画学専攻1回生）

タクロバンでの活動が3年目の年になり、今までの活動の良い点・悪い点が可視化された年になったように思う。過去を振り返りながら次の建設計画を進める中で、建築の難しさを痛感しながら、改善方法を考え実践することができると感じた。

大野宏（環境科学研究科環境計画学専攻1回生）

地域からのコメント

ステイ先の住人 Bong Stone

今年もこちらに来てくれて大変喜んでる。今まで製作してくれたいくつかのモノもまだ使うことができている。私たちの生活もだんだんと変化しているので、何を作るかなど難しいかもしれないが期待しているし、手伝えることがあれば手伝います。継続的に来てくれるようになって3年ほど過ぎ、地域の交流も深くなっているので、よりすばらしいモノが作れると思います。また、いつでもタクロバンにきてください。

指導教員より

環境科学部 J.R. ヒメネス・ベルデホ

昨年度作った場所は現在あまり使われていない。少しそこに問題を感じている。仮設住宅という公共的な場所がない所で人が集まれる場所はとても重要な役割を持つ。今年度の調査は十分にできているので来年度に向けしっかりと学生間で議論し課題解決をしてほしい。フィリピンの建築様式や現代の生活、被災地などの様々なことが調査をすることで学べているはずである。それらの経験はフィリピンだけではなく様々な場所で必ず役に立つ。日本とはまったく違う文脈で作られる建築を学ぶことができ非常によい経験となっている。来年度の活動に期待している。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



モックアップ



調査報告書



ワークショップ成果物

01 とよさと快蔵プロジェクト

2-2 『らくぎしんぶん』

チームが1年の活動をまとめた活動報告新聞です。共通トピックである①「チームのビッグニュース」②「プロジェクト紹介」③「プロジェクト自慢」④「地域の声」⑤「成果と課題」を中心に記事を作成しています。

近江楽座ホームページに、カラー版のPDF ファイルを掲載しています。ぜひご覧ください。

近江楽座 HP: <http://ohmirakuza.net/>



02 あかりんちゅ



11 とよさらだプロジェクト

とよさらだ新聞
とよさらだのビッグニュース

「とよさらだ」の旗
「とよさらだ」の旗を掲げ、地域を元気にしようという思いで、とよさらだプロジェクトがスタートした。このプロジェクトは、地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。

地域の声
地域の声を聴き、地域を元気にしようという思いで、とよさらだプロジェクトがスタートした。このプロジェクトは、地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。

成果と課題
このプロジェクトを通じて、地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。

12 八坂町プロジェクト

八坂町改宅新聞
八坂町シェアハウス(仮称)ついに施行

八坂町シェアハウス(仮称)ついに施行。このプロジェクトは、地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。

プロジェクトの軌跡
このプロジェクトを通じて、地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。

プロジェクトの意義
このプロジェクトを通じて、地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。

13 たのうらまちづくりプロジェクト

田の浦新聞
参加人数過去最多、TVで紹介も

田の浦ファンクラブ学生サポートチームの年間活動。このプロジェクトは、地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。

今年の成果
このプロジェクトを通じて、地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。

今年の課題
このプロジェクトを通じて、地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。

14 内湖の再生と地域の水辺コーディネート

生き物研新聞
守ろう!琵琶湖の在来種

滋賀県大生き物研究会。このプロジェクトは、地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。

みんなで外来魚駆除
このプロジェクトを通じて、地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。

2016年を振り返って
このプロジェクトを通じて、地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。地域を元気にし、未来を担っていくための活動を行う。

15 かみおかへ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-

16 Taga-Town-Project

17 たけとも -竹の会所・友の会-

18 おとくらしんぶん

共通プログラムの報告

3-1 活動の安全確保のためのスキルアップ講座



近江楽座における地域活動をより安全に行うために、実践的安全管理の進め方と、活動にともなうリスクの多い交通事故の防止について、専門家を招いて連続講座を開催しました。

Ⅰ 第一回 ボランティア活動における実践的安全管理について

日時：2016年7月12日(火) 18:10～20:40

会場：交流センター 研修室1~3

講師：NPO 法人国際ボランティア学生協会 (IVUSA)
事業部 深山恭介さん

アシスタント 花岡駿平さん(立命館大学4年生)

<プログラム>

1. IVUSA の活動紹介
2. 安全管理の方法① - リスクヘッジ -
3. 安全管理の方法② -KY (危険予測・予知) 活動 -
4. 安全管理の方法③ - チェックシート -

日頃から学生に、研修会や講習、ブリーフィング等、活動の危機管理に対する取り組みを多数行っている NPO 法人国際ボランティア学生協会事業部の深山恭介さんを講師に招き、グループワークを行いながら実践的な安全管理について学びました。また、アシスタントとして IVUSA に所属する立命館大学の花岡駿平さんが IVUSA の活動を説明していただき、自分たちと同じ学生から、直接話を聞くことで、近江楽座の学生たちもより身近なこととして捉えることができました。

○危機に対する備え(リスクヘッジ)

日常や活動において、どんなリスクが存在するか「知る」ことで、どんなリスクが発生するのか「予測」が生まれ、リスクを未然に防ぐ「準備」や、発生した場合の「対応」ができる、これが危機管理の基本の流れになります。

この流れをつかむため、グループで、日常に潜むリスク(危険)をそれぞれ挙げ、それに対するヘッジ(準備と対応)を話し合い、書き出しました。

○危機予測活動

昨年度の近江楽座の活動写真を見ながら、あらかじめ配られたシートに沿って、どんな危険があり、それに対しどのような対策をすればよいのかグループで考えていきました。実際の活動では刻一刻と状況は変化するため、考えすぎず瞬時に判断することが大切です。

○チェックシートの作成

「交通事故」という大きなリスクを防ぐため、「もう少しで事故になっていたかもしれない」という自分自身の経験を挙げ、それを防ぐためのアドバイスを書き出し、チェックシートを作りました。この

チェックシート全グループ分をまとめ、各チームに配布しました。

最後に、グループごとに出しあった意見を発表し、危険やそれに対する対応を全体で共有しました。安全管理の基本はリスクを知ること。それぞれの近江楽座チームにおいても、メンバー同士で活動の安全管理について、是非、実践してほしいです。



深山さんからお話を聞く



チームで話し合いリスクを書き出す



出しあった意見をグループごとに発表

Ⅱ 第二回 交通事故防止について

日時：2016年7月21日(木) 18:10～19:10

会場：交流センター 研修室1～3

講師：彦根警察交通課巡査長 西口しお里さん

前半は自転車の安全利用や滋賀県での取り組み、自動車事故等についてお話していただきました。実際に西口さんが出会った交通事故や取り締まり事例を上げながら、安全運転の重要性について、ホワイトボードを使いながら、分かりやすく説明してくださいました。後半は安全運転についてのビデオを見て、「判断力に自信のある人は自分の能力から推測して相手もこうだろうという思い込みは禁物」など、車を運転中に気をつけるポイントを学びました。



ホワイトボードを使い説明いただく



会場の様子

3-2 中間報告会「伝えよう！活動のあしあと展」



日 時：2016年11月15日(火)～18日(金)

各日 18:10～19:40

会 場：交流センター 研修室1~3

参加者：約60名

前半の活動を振り返り、ノウハウを共有し、伝えることを目的として、中間報告会を開催しました。

<中間報告会日程>

	グループ①	グループ②	グループ③	グループ④
日 程	11月15日(火)	11月16日(水)	11月17日(木)	11月18日(金)
参 加 チ ー ム	未来看護塾	あかりんちゅ	とよさと快蔵プロジェクト	スチューデント・キュレイターズ
	八坂町プロジェクト	政所茶レン茶'ー	信・楽・人 -shigaraki field gallery project-	BAMBOO HOUSE PROJECT
	田の浦ファンクラブ 学生サポートチーム	とよさらだ	滋賀県大生生物研究会	座・沖島
	かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-	Taga-Town-Project	ボランティアサークル Harmony	廃棄物/バスターズ
	たけとも -竹の会所・友の会-	たくろばん復興支援 プロジェクト	おとくらプロジェクト	木興プロジェクト
	男鬼楽座		フラワーエネルギー 「なの・わり」	エコキャンパスプロジェクト

1. 活動の振り返り、記録

チームが前半に行った活動を事業ごとにきちんとまとめることで、活動を客観的に振り返るとともに、活動を継続していく上で重要な「活動記録」をチームに残していきます。

2. 活動の過程・ノウハウを後輩に伝える。共有する

それぞれの世代やフィールドでメンバーが得た「学び」は、チームにとって、そして近江楽座にとっても、とても大きな財産といえます。

しかし、このような個人の「学び」は、意識しないと伝わることなく途絶えてしまいがちであり、現在一緒に活動している後輩や、これから活動に加わる後輩のために、それらのものを形にして伝えることが重要です。そして同時に、色々なチームの学びを共有して、後半の活動がより充実したものになっていく事を目指します。

<プログラム>

1. 各チームからの活動報告
2. 「活動記録シート」へのコメント
3. コメントの共有

Ⅰ 第一部 各チームからの活動報告

スライドを用いて、前期に行った活動の報告と、今後の予定について発表しました。1チーム5分という短い時間のなかで、どのチームの発表もよくまとまっており、聴衆は皆メモを取りながら聞いていました。



第一部 各チームからの活動紹介



活動紹介



メモを取りながら活動紹介を聞く

Ⅱ 第二部 「活動記録シート」へのコメント

第一部でのチームからの発表を聞き、発表内容をまとめた「活動記録シート」を見て、チームへの質問や提案などのコメントをふせんに書き出します。それを「活動記録シート」が展示されているパネルに貼りつけました。ふせんは色ごとに用途を使い分けています。(黄：質問 赤：共感したこと 緑：その他)



第二部 発表のメモなどをもとにコメントを書きしていく



「活動記録シート」が展示しているパネルに貼り付けていく

Ⅰ 第三部 コメントの共有

1チームずつパネルを見ながら、第二部で寄せられたコメントを紹介し、全体で共有していきます。司会は次のチームの学生が行い、質問にはチームのメンバーに答えてもらいました。

多くのチームで課題として、「メンバーの参加率の低さ」が挙げられていました。しかし、「実験も行うことがあるので、メンバーの募集は大々的に行っていない」といったチームもあり、チーム間で様々な考え方があるようでした。

「移動手段がないこと」も多くのチームで課題として挙げられていました。長く続くチームの中には、地域の方に移動の協力をさせていただき、それにより交流にもなっているというチームがあり、今までの信頼関係があつてこそだと感じました。

印象的だったのは、自身の研究分野が近江楽座の活動に活かされているチームも多いことです。「学術的であり、地域で活動しているプロジェクトは楽座ならではの」というコメントもあり、大学として、活動が教育になることの重要性も感じました。

同時に、授業と近江楽座の活動との違いも、どのチームもしっかり認識していました。例えば、「実習で地域の方と触れ合う場合は援助を目的しており、近江楽座の場合は交流を目的としている」「授業ではコピーしか手にできないが、活動では本物に触れることができる」といったように、近江楽座ならではの魅力が語られました。

第三部は学生が司会をするため、日によってまったく雰囲気が違っているのも印象的でした。

報告会の後には、代表同士で連絡先を交換する場面も見られました。



第三部 会場内でコメントを共有&質問回答



司会の学生が寄せられたコメントを紹介



司会の学生が質問しチームの代表が答える

Ⅰ まとめ

報告会后、参加者に書いていただいたアンケートには、他のチームの活動内容を賞賛するコメントが多く寄せられました。自分たちの活動にも共通する悩みや苦勞している点も聞けて、大いに参考になったという意見も多くありました。

一方で、中間報告会には近江楽座以外の学生にも参加してもらいたい。どう引き込むかが大事、もっとたくさんの人に周知されるとよいとの意見もあり、どの団体も人数不足が課題となっている中で、近江楽座全体の活動の裾野を広げていくことが問題提起されました。

Ⅰ 活動のあしあと展

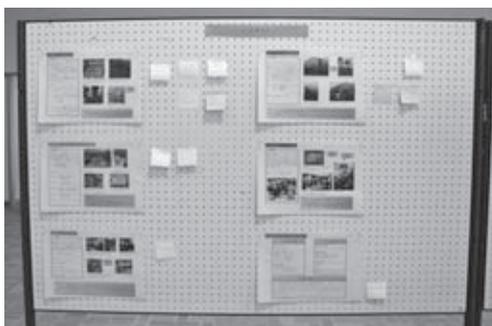
日時：2016年11月15日(火)～18日(金)
会場：交流センター研修室1～3、ホワイエ

中間報告会の期間中、「活動記録シート」の展示を行いました。

また、21日(月)には、交流センターホワイエにて、報告会で全チームへ寄せられたコメントもあわせて展示しました。



活動のあしあと展



3-3 活動報告会 まちづくり farmer's festa - まちをたがやす人たちの感謝祭 -



日 時：2017年4月15日(土) 9:30-17:10
 会 場：中講義室 A7-101、A7 棟自習室
 参加者：約 80 名

2016 年度近江楽座採択プロジェクトの活動報告会を行いました。

<活動報告会 グループ分け>

	【パート1】 9:45 ~ 10:50 <交流>	【パート2】 11:20 ~ 12:40 <教育・普及>	【パート3】 14:00 ~ 15:05 <文化・生活>	【パート4】 15:35 ~ 16:55 <発信>
司 会	竹下宏樹 (工学部)	中村好孝 (人間文化学部)	鈴木一実 (環境科学部)	迫田正美 (環境科学部)
チ ャ ッ ム	とよさと快蔵プロジェクト	あかりんちゅ	スチューデント・キュレイターズ	政所茶レン茶 [®] ー
	廃棄物バスターズ	BAMBOO HOUSE PROJECT	座・沖島	信・楽・人 -shigaraki field gallery project-
	八坂町プロジェクト	ボランティアサークル Harmony	とよさらだ	Taga-Town-Project
	田の浦ファンクラブ 学生サポートチーム	未来看護塾	木興プロジェクト	たけとも -竹の会所・友の会-
	かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-	滋賀県大生き物研究会	男鬼楽座	おとくらプロジェクト
	フラワーエネルギー 「なの・わり」		タクロバン復興支援 プロジェクト	

<プログラム>

- 開会挨拶 (廣川能嗣 学長)
- 活動発表 【パート1】 ~ 【パート4】
- 全体総括

<ゲストスピーカー>

- 岩寄博論 氏 (株式会社博報堂ブランド・イノベーションデザイン局 ディレクター)
- 中山郁英 氏 (ながはま市民活動センター コーディネーター/一般社団法人滋賀人 マネージング・ディレクター)

| 活動発表

全 22 プロジェクトを活動内容に応じて、下表の 4 つのテーマに分け、テーマごとにチームからの発表と質疑応答を行いました。発表 7 分、質疑応答 5 分の短い時間で 1 年間の活動内容についてポイントを絞って、各チーム様々に工夫をこらした発表を行いました。

学外から 2 名のゲストをお招きし、評価や活動のアドバイスをいただきました。会場の地域関係者や近江楽座の OB・OG、学生や指導教員からも質問やコメントをいただきました。

【パート1】では、「ゲストハウスをつくる活動を踏まえて、今後、どのようにしていきたいのか。地域ではどのような動きがあるのか」、「どういう所へ、どういう理由で人が出ていくかを調べると活動（空き家対策）のヒントが得られるのではないか」、「ひょうたんの商品化がすごくおもしろい」等。

【パート2】では、「ハロインのジャック・オー・ランタンのような、新しい習慣をつくりだすような商品づくりもおもしろいのでは」、「活動で一番、学んだことや成長したことは（落ち着いて行動できるようになったこと）」、「子どもたちの成長とサークルの成長がうまく重なり合っている」、「看護の未来について考えていることは（話すことによって健康になれるとか）」、「学内の資源や学外との連携が非常にうまくやられている」等。

【パート3】では、「展示とか見せる方法をまず考

えると、どういう情報を収集すればよいかかわかる」、「この活動はこれと言えるものを意識されるとよいのでは（沖島に学生がいることで島の人たちも変わっていく。だから長く続くプロジェクトにしたい。）」、「地域の人とつながっているとか、他の団体と協働しているとか、県立大学らしい。出荷しようと思っていることはよいこと。お金を払っていただく価値のあるもの、いいものをつくることにつながる」、「建物をつくる、次のプログラムが大事（今どうすべきか、まさに悩んでいる）」、「どうしたら再生したものを使ってもらえるのか、考えてほしい」等。

【パート4】では、「農作業とイベントの時間配分についてアドバイスを（農繁期にイベントを行うのは避け、負担にならない時期にやるようにしている）」、「窯元手帳がすごくよく出来ている。これを見て信楽に行きたくなる人もいる。行った後、スマ



発表の様子



ゲストスピーカーから質問を受ける



活動の成果物を用いて発表を行う



地域の方からのコメント

ホによる発展形もあると思う」、「自分たちが楽しむこともすごく大切なこと」、「活動の達成感を周りに広げていく、巻き込んでいくことでメンバーを増やして行ってほしい」、「震災後、状況が変化することで活動も新しい段階にきている（記録をまとめて区切りをつけることが次につながるのでは）」、「カフェは新しい活動の結合が生まれる場になる」、「東北とフィリピンの被災地の活動を通して、ローカルとローカルから共通の課題が見えてくる」等の質疑応答やコメントをいただきました。

Ⅰ ゲストより話題提供

2名のゲストより、新しい価値を生み出し、社会を大きく変えていくイノベーション・プロジェクトやイノベーション人材の育成について、お話いただきました。

1. 「イノベーション人材の育成」 中山郁英氏

3月まで東京大学のイノベーション・スクールで働いていた。4月から滋賀の方に拠点を移して活動している。

そもそもイノベーションって、何だろうか。人々の行動や価値観、社会の構造を不可逆的に変化させる、それを生み出すアイデアといったものがイノベーション。なぜ、注目されているのか。社会を形づくっている前提が大きく変化している。人工知能やロボット技術など、人の役割が揺さぶられる。また、社会の上り坂の時につくられたものを、これからどうやって維持するのか等。

イノベーションを生み出す人材はどういったら育てられるのか。東京大学 i.school では人間中心イノベーションというキーワードを使っていた。教育目標として、新しいアイデアを生み出すプロセスを

身につけて、他の人を巻き込みながら活動ができる人を育てることを掲げている。学内だけでなくその他の教育機関や企業の方が参加している。イノベーション人材の要素として、スキルセット（ワークショップをどのように組み立てるとかの能力）、マインドセット（心がまえ、新しいものに挑戦するのを怖がらないとか）、モチベーション（やりぬく気持ち）の3つを掲げ、それらを育てることを実践してきた。特にモチベーションは、育てようと思ってもできないところがある。いろんな人と出会って、刺激を受けられる機会をたくさんつくるのが大事。

ながはま市民活動センターはイノベーションを生み出すセンターにしていきたい。自分たちの地域は自分たちでつくるという方針を打ち出し、暮らしデザインプロジェクトをワークショップを行いながら実施している。

最後に、皆さんは自分自身のモチベーションを是非、見つけて行ってほしい。



2. 「生活者起点のイノベーションプロジェクト」

岩寄博論氏

Design thinking とは、新しいものをつくる時にデザインの広義の意味、「設計」という領域における考え方を使おうというもの。デザインのプロセスを明文化すると、まず「共感・理解」、次に「統合・

構想」。アイデアをつくるということは、合体させて新しいものをつくるということ。最後は「試作・試行」。試してみる。このサイクルを回していこうというのが、Design thinking。生活者起点の新しいものづくり方として注目されている。

まず、現場に行ってみよう。フィールドワークをする。モノを見る見方が変わる。自分自身が変わる体験が得られる。次の「統合・構想」では、フィールドで見聞きしたことを、ポストイットや写真を活用して貼り出す。情報を物理化する。ポストイットの場所を変えることで、新しい結合が生まれやすくなる。パソコンの中では生まれにくい。情報を物理化することによって、新しいアイデアやコンセプトが生まれる。最後の「試作・試行」では、思いついたことをクイックに形にすることでも大事。なるべく短い時間で形にして世の中に出して行って、そこから学習していこうというもの。こういうことを通じて、自撮りしやすいカメラとか生れている。カーブで転ばないというコンセプトで、アキレスが靴をつくって、爆発的に売れている。



| 学生委員会より報告

近江楽座学生委員会より、滋賀県（住宅課）より申し出があり、協働で進めているBプロジェクト「県営開出今団地コミュニティ再生プロジェクト」について、その背景と概要、活動スケジュール、成果と今後の展望等について報告がありました。



Bプロジェクトについて報告

| 全体総括

地域共生センターの上田洋平先生より、学生が地域に入って活動することで、地域の方に教えてもらったり、地域との連携が進んできていることがよくわかっておもしろかった。

何かを「する」という価値から、「いる」という価値が大きくなってきているように思った。楽座の中にも、老舗のプロジェクトから新しいものまでがある。「いる」、「する」、「なる」という価値がぐるぐるまわって、成長しているとのコメントをいただきました。

｜ 活動成果展示会

日時：2017年4月17日(月)～21日(金)

9:00～17:00

会場：交流センター ホワイエ

交流センターホワイエにて、全チームの活動報告展を開催しました。活動を新聞形式にまとめた「楽座新聞」(A1版)や各チームの成果物、活動紹介パネル、写真やアルバム等、チームの魅力を伝えるものがたくさん展示されました。



楽座新聞



チームの成果物

4 学生有志活動

4-1 近江楽座 合同説明会「楽座市」



"近江楽座や近江楽座チームをもっと知ってもらおう！"、"活動に興味を持ってもらおう！"という目的から、近江楽座学生委員会の呼びかけにより、15の有志チームによる近江楽座説明会が開催されました。

Ⅰ 学生委員会とは

近江楽座をさらに推進していくために、チーム間の交流・連携を目的として発足した有志学生による組織です。2006年に、当時のプロジェクトチームの代表経験者が中心となり結成されました。学部・学科・プロジェクトの枠を超えて活動の輪を広げ、地域活性化に貢献するためのネットワーク形成を目指し、学生ならではの視点で近江楽座をサポートしています。

Ⅰ 楽座市

日 時：2016年4月21日(木)、22日(金)

17:00~19:00

会 場：交流センターホワイエ

開催内容：

- ブース相談会
- 活動紹介発表
- 2015年度全チームの活動報告新聞の展示

<参加チーム>

- ・とよさと快蔵プロジェクト
- ・あかりんちゅ
- ・スチューデント・キュレイターズ
- ・政所茶レン茶`ー
- ・フラワーエネルギー「なの・わり」
- ・ボランティアサークル Harmony
- ・廃棄物バスターズ
- ・信・楽・人-shigaraki field gallery project-
- ・木興プロジェクト
- ・おとくらプロジェクト
- ・男鬼楽座
- ・Taga-Town-Project
- ・かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-
- ・とよさらだ
- ・八坂町プロジェクト

開始直後から沢山の新生が入場し、大賑わいとなりました。それぞれのチームは、パネルや展示物、冊子などを使って自分たちの活動を説明しました。政所茶レン茶`ーには、美味しいお茶を振舞っていただきました。

新生は先輩たちの説明を熱心に聞いており、その場で「このチームに入りたい」と希望する学生もいました。

楽座チーム同士の交流も深めることができる学生委員会主催の「楽座市」は春の恒例行事として定着しています。



会場の様子



ブース相談会



成果物のお茶を振る舞いながら活動紹介



楽座新聞を眺める参加者



集合写真

4-2 オープンキャンパス

日 時：2016年7月23日(土)、24日(日)

9:00～15:00

会 場：交流センターホワイエ

オープンキャンパスにて、近江楽座の紹介を行いました。親子で関心を持っていただき、真剣に話を聞いてくださいました。

開催内容：

- プロジェクトごとの活動紹介、相談会
- ムービーでの活動紹介
- 活動展示

<参加チーム>

- ・ 学生委員会
- ・ とよさと快蔵プロジェクト
- ・ あかりんちゅ
- ・ 政所茶レンジャー
- ・ かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-
- ・ Taga-Town-Project
- ・ おとくらプロジェクト



プロジェクトの活動説明、相談会



来場者に学生が活動説明を行う



会場の様子



ムービーでの活動紹介

4-3 ぞろぞろ会

「ぞろぞろ会」とは、チーム間の近江楽座メンバー同士の交流を目的として、2009年に始まった取り組みです。2016年度は、計2回開催しました。

チームや学部学科、学年の枠を越えて交流でき、チーム間の情報交換も行われました。

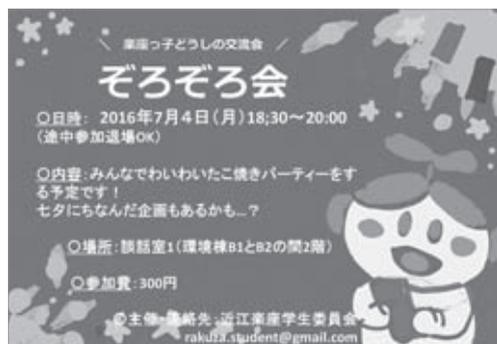
| 第18回 ぞろぞろ会

日 時：2016年7月4日(月)

18:30～20:00

会 場：環境棟談話室1 (B1-200)

内 容：たこ焼き作り



第18回 ぞろぞろ会



| 第19回 ぞろぞろ会

日 時：2017年1月20日(金)

18:30～20:30

会 場：環境棟談話室1 (B1-200)

内 容：チーズフォンデュ

「みんなの考える 自分の入っている楽座のミリョク!」それぞれの所属団体の魅力を書き出し、共有するワークショップ



第19回 ぞろぞろ会

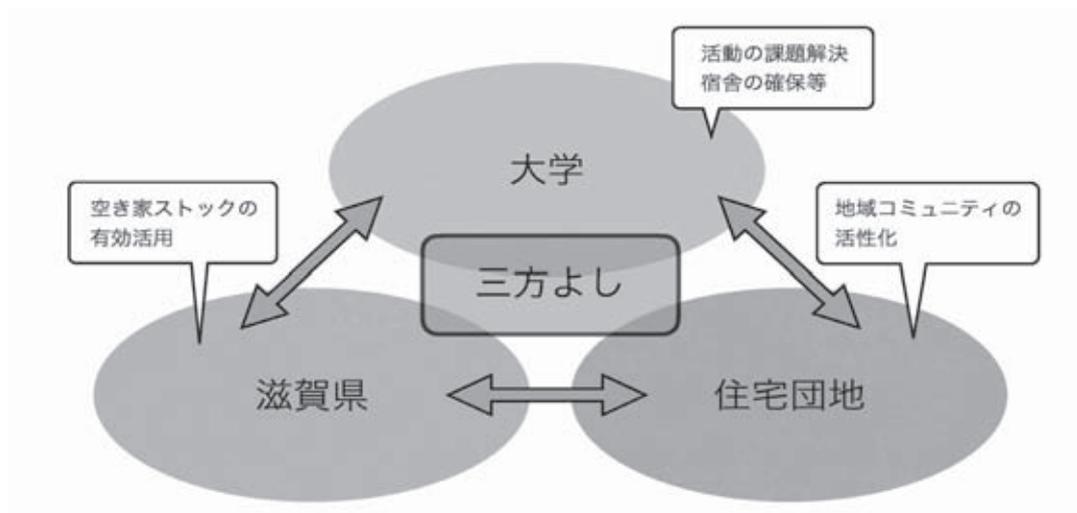
4-4 B プロジェクト「県営開出今団地コミュニティ再生プロジェクト」

2016年6月、滋賀県から県営住宅の空き住戸を大学の学生宿舎等に活用し、住宅団地のコミュニティ活性化に寄与する取り組みを進めたいという申し出がありました。また、近江楽座では、学内でのミーティング、イベント準備のための作業空間や定例活動の場所の確保に困っているチームも多く、また活動資料や資材の保管、成果物の展示等が行える拠点づくりが課題となっていました。そこで、近江楽座学生委員会が中心になって、滋賀県と共に取り組むBプロジェクトとして県営住宅の空き住戸を活用した地域コミュニティの活性化を図る取り組みを進めることとなりました。

2016年度は、空き住戸、1戸を学生活動の拠点「楽座オフィス」として整備し、また2戸を学生が実際に団地に暮らしながら地域と関わる活動ができる「シェアハウス」にする準備を進めました。2017年3月10日に滋賀県立大学と滋賀県が協定を締結し、正式に使用していくことになりました。今後3年間を目途に活動を進めていく基盤ができました。引き続き、学生活動の拠点を整備し、近江楽座の学生プロジェクト同士の交流を図りながら、地域のニーズに対応した活動を生み出し、地域コミュニティの活性化に貢献することをめざしています。



楽座オフィスの一室



5 他大学等との交流

5-1 法政大学との交流

日 時：2016年9月10日(土)

場 所：彦根市高宮町 喫茶おとくら (座・楽庵)
不破邸、座ギャラリー

法政大学の小峰ゼミの皆さんと滋賀県の池永副理事が近江楽座の活動を見学するため、喫茶おとくらにいらっしゃいました。

地域共生センターの上田先生がコーディネートして、県立大学の「近江楽座」や「近江環人」等、地域教育プログラムの取り組みを紹介されました。

近江楽座からは、おとくらプロジェクトの他に政所茶レン茶[®]一や座・沖島も参加し、活動発表し、学生同士交流しました。

この時おとくらのギャラリー輪々(喫茶スペース横の展示)では、座・沖島主催の「沖島写真展」が開催されており、写真で見る沖島の人々の様子もご覧いただきました。



旧近江商人の邸宅である不破邸での報告会と交流の様子



座・ギャラリーの見学

5-2 全国公立大学学生大会 LINK topos

2012年11月、静岡県立大学での公立大学学長会議特別シンポジウム&ワークショップ「公立大学生による被災地支援と地域防災活動」が開催され、そこに参加した学生たちが中心になって、公立大学学生ネットワーク結成されました。“LINKtopos”と命名され、SNSなどを使って活動が始まりました、topos(トポス)は「場」を意味するギリシャ語。学生間での交流、情報交換等を通じて学生の地域における活動の促進、向上、そして活動を行う上での課題等の解決のための情報共有を目的としています。

本ネットワークにより、これまで第1回大会(2013年10月/岩手県立大学/34大学81名の学生参加)、第2回大会(2014年10月/兵庫県立大学、人と防災未来センター/33大学104名参加(今大会から学生以外に教職員も参加))、第3回大会(2015年10月/愛知県青年の家、名古屋市立大学/27大学93名参加)が開催され、今回、第4回の大会が行われました。

○第4回全国公立大学学生大会 LINK topos

日 時：2016年10月8日(土)～10月10日(日)
場 所：北九州市立玄海青年の家、まなびとESD
ステーション、北九州市立大学

参加者：38大学119名

内 容：交流会

地域と大学のつながりを学ぶシンポジウム
地域の未来を考えるワークショップ
それぞれの大学の地域活動や防災活動
などを紹介するポスターセッション
学生と学長との交流プログラム

全国の公立大学の学生が交わり、教職員もその輪の中に一緒に入って、2日間の日程で、ワークショップを行いました。地域の未来を想定し、課題を設定し、課題解決の企画を考え、提案としてとりまとめ、発表するというややハードな内容でしたが、非常に刺激的で、新たな気づき、発見が多い楽しいものでした。何よりも、同じ公立大学の

学生同士が深く交わることができ、参加した学生にとって大きな財産になっていくと思います。

本学からは学生1名(2名予定)と職員1名が参加しました。参加した学生は、ポスターセッションにおいて、多くの大学の学長と話し、近江楽座の活動を大いにアピールし、注目されていました。

今後、地域ブロックでの学生の交流、ネットワークづくりを進めていくことも確認され、新しい風がおこっていくことが期待されます。



ワークショップ



ポスターセッション



集合写真



情報発信

6-1 ホームページ、プロジェクトレポート、リーフレット

｜ 近江楽座ホームページの運営

URL : <http://ohmirakuza.net/>

滋賀県立大学における、学生の地域活動に関するポータルサイトでもある近江楽座ホームページの運営を行い、随時最新情報を更新しています。学生たちの活動の様子をより多くの人に見てもらえるサイトにするため、2016 年度もリニューアルを行いました。

<リニューアル内容>

- 「事務局からのお知らせ」更新日付追加
- 問い合わせフォーム追加

<追加コンテンツ>

- 楽座人物図鑑(池山邑華さん)
- 楽座文庫
過去の近江楽座プロジェクトの成果物を追加

｜ プロジェクトレポート

事務局スタッフが、実際にプロジェクトの現場を訪れ、活動レポートを作成・発行しました。本年度は計 3 号発行。発行したレポートは、学内食堂前にある近江楽座掲示板と、近江楽座ホームページ上で掲載しました。

< 2016 年度プロジェクトレポート >

- [政所茶レン茶[®]ー] 茶摘みイベント
- [とよさと快蔵プロジェクト他] ミツマルシエ
- [田の浦ファンクラブ学生サポートチーム]
語り部交流会



プロジェクトレポート
(政所茶レン茶[®]ー、とよさと快蔵プロジェクト)

｜ 活動紹介リーフレット 2016

デザイン：堤愛里加

取材協力：学生委員会

近江楽座プロジェクトで活動する学生に依頼し、近江楽座全体の取り組みや、本年度近江楽座に採択された 23 プロジェクトを写真入で紹介するリーフレットを作成しました。近江楽座 OB・OG にインタビューした「-VOICE-先輩の声」では学生委員会が取材を行いました。



近江楽座活動紹介リーフレット 2016

7 付録

7-1 プログラム推進メンバー※

事業推進代表者

滋賀県立大学理事長 大田啓一

事業推進責任者

近江楽座専門委員会 委員長 印南比呂志

近江楽座専門委員会

環境科学部

浦部美佐子

林宰司

村上修一

金子尚志

迫田正美

工学部

河崎澄

柳澤淳一

人間文化学部

石川慎治

武田俊輔

印南比呂志

佐々木一泰

細馬宏通

人間看護学部

伊丹君和

横井和美

地域共生センター

鵜飼修

近江楽座事務局

秦憲志

廣嶋泉

田中真理子

※ 2016 年度 (平成 29 年 3 月末時点)

このほか、近江楽座に関わり支援いただいたすべての方にお礼申し上げます。



7-2 メディア掲載一覧

No	日 時	チーム	メディア・団体	見出し・視察内容
1	2016.4.6	とよさと快蔵プロジェクト	彦根 JC 月報 4 月号	～アメイジングな団体を探せ!～とよさと快蔵プロジェクト
2	2016.8.16	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	豊郷で県立大生 古民家改修 交流の場に
3	2016.8.26	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	伝言板 学生によるビアガーデン
4	2016.10.28	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	県立大生経営 豊郷のバー「タルタルーガ」出合いの場紡いで 10 年
5	2016.11.1	とよさと快蔵プロジェクト	広報とよさと	ゲストハウスの改修について
6	2016.5.16	政所茶レン茶 [＊] ー	中日新聞	県立大生ら 茶摘み参加募る 皆で守ろう政所茶
7	2016.5.17	政所茶レン茶 [＊] ー	毎日新聞	「政所茶」産地で学生たちが茶摘み体験
8	2016.5.23	政所茶レン茶 [＊] ー	中日新聞	政所茶レン茶 [＊] ー 若い力で在来種を守る
9	2016.9.20	スチューデント・キュレイトーズ	中日新聞	民具 手に取る歴史 県立大生 米原の集落で調査
10	2016.9.8	座・沖島	中日新聞	沖島住民の表情写す 彦根で展示
11	2016.11.1	廃棄物バスターズ	グッドライフアワード(環境省)	環境と福祉を繋ぐ「hana-wa」活動
12	2016.11.23	ボランティアサークル Harmony	しが彦根新聞	県大でコンサート 風船ショーなど 26 日
13	2016.11.25	ボランティアサークル Harmony	NHK FM	地域に密着したボランティアの紹介・クリスマスコンサートの宣伝
14	2016.11.27	ボランティアサークル Harmony	中日新聞	障害者も気兼ねがなく 県立大でクリスマス曲楽しむ
15	2017.1.29	未来看護塾	京都新聞	豆まき 患者の邪気払い 彦根市立病院
16	2017.1.29	未来看護塾	中日新聞	入院患者の健康願う 彦根市立病院 県立大生ら演奏
17	2016.8.7	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	宮城テレビ	海の運動会
18	2016.8.8	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	河北新聞	被災地の漁港で綱渡りや玉入れ 海の大運動会
19	2016.8.8	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	三陸新報	海の運動会
20	2016.9.15	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	NPO 法人夢未来南三陸 広報誌「一燈」	田の浦地区で「海の大運動会」
21	2017.2.14	滋賀県大生き物研究会	関西テレビ	琵琶湖の漁師不足から滋賀県がバックアップしている漁師のインターンについて
22	2017.3.18	Taga-Town-Project	多賀町有線放送	自然いっぱい多賀のまち
23	2016.5.20	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	盲導犬の育成へ慈善コンサート
24	2016.5.28	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	桂三ノ助 & 桂二葉おとくら寄席 29 日
25	2016.7.16	おとくらプロジェクト	しが彦根新聞	高宮で抽象画展
26	2016.8.25	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	県大生と夏休みの宿題「寺子屋」27 日
27	2016.8.28	おとくらプロジェクト	中日新聞	「寺子屋」で夏休み満喫
28	2016.8.30	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	夏休みの宿題できたかな

No	日 時	チーム	メディア・団体	見出し・視察内容
29	2016.9.1	おとくらプロジェクト	びわこ新聞	ガンバレ地元の熱血プロジェクト
30	2016.11.4	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	よみたい万葉集原画展 5日から
31	2016.12.3	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	桂三ノ助 & 桂小梅おとくら寄席 4日
32	2016.12.7	おとくらプロジェクト	しが彦根新聞	米田愛さん遺作展「明るい作品」
33	2017.3.6	おとくらプロジェクト	彦根 JC 月報 3月号	まちづくり!?!@ひこね おとくら編
34	2016.6.17	フラワーエネルギー 「なの・わり」	ZTV	滋賀県立大学「なのわり」と作って遊んで実験しよう
35	2016.8	木興プロジェクト、田の浦ファンクラブ学生サポートチーム、未来看護塾	滋賀県立大学後援会 会報 hassaka vol.43	大規模災害ボランティア助成事業 田の浦との絆
36	2016.5.22	近江楽座	中日新聞	学生や院生団体 県立大で公開プレゼン 地域の活性化へ活動

公立大学法人 滋賀県立大学
スチューデントファーム「近江楽座」
まち・むら・くらしふれあい工舎

2016 年度活動報告書

平成 30 年 2 月発行

発行	公立大学法人 滋賀県立大学 地域共生センター 〒 522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500 TEL. 0749-28-8616 FAX. 0749-28-8473
企画・編集	近江楽座事務局
印刷・製本	近江印刷株式会社
構成・デザイン	前川瑛美梨

本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製、転載することは禁止されています

最新情報は、近江楽座ホームページ：<http://ohmirakuza.net> をぜひご覧ください

